

明治3年(1870)

〔稿本表紙〕

明治三年
十二月
忠義公史料稿本(初稿)十三

〔稿本にて補正〕

九四四 藩庁皇軍神社遷座式執行ヲ令ス

十二月朔日

藩庁皇軍神社遷座式執行ヲ令ス、
九四四ノ一
一來十日

皇軍神社

御遷祭被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年午十二月朔日

知政所

九四四ノ二

寺師宗道日記十二月

同日 晴

今日御軍神御遷宮之御祭礼有之、出勤掛拜見候、兵隊
祝砲打之式礼有之候、大砲・小銃隊四大隊并ニ兵器隊・
外城隊、砲台迄も其式あり、

祭神

武甕槌神

經津主神

橘正成卿

忠久公

忠良公

貴久公

義久公

義弘公

齊興公

齊彬公

右之拾神奉祭候由、

九四五 赤塚源六海軍中佐ヲ辞スルモ聴許ナシ

十二月三日

赤塚太郎源六海軍中佐ヲ辞スルモ聴許ナシ、
九四五ノ一

赤塚太郎辞職願之儀、別紙御付紙之通候条、同人江御
達可有之候也、尤当人呼出之上可相達之処、船艦乗組

ニも可有之候間、御省より達方御取計相成候様申入候

義ニ有之候、此段御心得迄申入候也、

庚午十二月三日

弁官

兵部省

御中

追テ本文之証書御廻し可有之候也、

九四五ノ一

私事、今般海軍中佐御役被 仰付、実以驚愕之至ニ奉
存候、当御役之義ハ、数艘之御軍艦をも致指揮候事ニ
て、至重之任ニ候得ハ、逆も私式不肖之身を以、御受
申上之義難出来、且ハ对万国シても国内人才無之様ニ
て、却て御困辱罷成可申候ニ付、甚恐入奉存候得共、
別人才御登庸被為在、私義は速ニ免職被仰付被下度、
此段宜御執
奏可被下候、以上、

庚午十一月廿九日

赤塚太郎

弁官

御中

付紙、難及御沙汰候事、

九四五ノ三

赤塚海軍中佐病氣ニ付、為療養帰藩仕度段、願書差出

申候、右は御聞届ニ相成候て、其省ニおるても差支無
御座候哉、為念一応及御問合候也、

庚午十二月七日

弁官

兵部省

御中

九四五ノ四

赤塚海軍中佐病氣ニ付、為療養帰藩願書差出候ニ付、
当分差出之有無御尋問相成、承知仕候、右ハ何分帰藩
候ては差支候条、御許容難相成段御沙汰被下度、尤於
当地ニ療養可有之旨をも御添達相成度、此段御答申出
仕候也、

庚午十二月八日

兵部省

弁官

御中

〔朱〕願書並此末ノ御達書等留記ニ無之趣、海軍省ヨリ申
出ル

九四六 侍従高辻修長ヲ京都ニ遣シ、勅書ヲ岩倉

具視ニ伝フ

十二月三日

岩倉具視、勅使トシテ鹿兒島へ差遣ニ付、侍従高辻修長ヲシテ京都ニ至ラシメ、勅書ヲ具視ニ伝フ、

十二月三日、侍従高辻修長勅使トシテ京都ニ至リ、勅書ヲ具視ニ伝フ、其文ニ曰ク、

方今之形勢、前途之事業実ニ不容易義ニ付、毛利從二位・島津從三位上京、朕ヲ輔翼大政ヲ賛成シ、兩藩一致戮力諸藩之標準トナリ、大ニ皇基ヲ助ケ候様、

朕カ旨ヲ伝へ、誠意貫徹候様尽力可致令委任候事、又山口豊榮神社・鹿兒島照國神社へ、各御劍一口ヲ納ムヘシトノ旨ヲ伝フ、御沙汰書ニ曰ク、

岩倉大納言

今般深叡慮ヲ以テ、御劍一口長州豊榮社へ被為納、

国家興隆之御祈誓被為在候条、御趣意奉戴、参拜可

致之旨御沙汰候事、

庚午十二月

實美

實則

實愛

岩倉大納言

右同文但薩州照國社ニ作ル、

實美ノ副翰ニ曰ク、

今般兩藩へ御伝ニ相成候御沙汰之儀ハ、勅書之御旨趣御拡張、從來御談申候通之意味ヲ以テ、可然御賢慮次第御演達可給候、仍テ別段御演述振ハ不申入候、何分筆紙之所及ニ無之候間、宜御諒察奉希候也、

十二月

實美

岩倉殿

二伸、西郷之処ハ別段御沙汰ハ無之候得共、隨從

上京御座候様御通達有之度候也、

具視御請書ヲ上ツル、其文ニ曰ク、

勅書

一通

毛利從二位へ

勅書

一通

島津從三位へ

勅書

一通

具視へ

兩社参拜ニ付御沙汰書

二通

具視へ

御太刀

二口

山口・鹿兒島兩社へ

右勅使高辻侍從ヲ以、御伝へ御沙汰之条々、謹テ拝承仕候、重大御用之儀、微力何共恐入存候得共、尚不日発途兩國へ参向、御趣意貫徹候様勉勵可仕、此段御請迄如此、宜御執奏願存候也、

庚午十二月三日

具視

右大臣殿

大納言殿

九四七 黒田清隆ヨリ岩倉具視へ書翰

十二月五日

黒田清隆外手書ヲ岩倉具視ニ寄セテ、鹿兒島・山口兩藩ノ一致ヲ促カスコトニ尽力セントヲ請フ、

〔附注〕黒田清隆、書ヲ具視ニ寄セテ、兩藩ノ一致ヲ促スコトニ尽力セント請フ、其文ニ曰ク、

謹啓、愚存左ニ申上候、

一 廟堂之病根ハ、薩長合ト否ニ在リ、又情義ヲ尽スト否ニ在リ、我旧藩ノ如キハ退テ功ヲ人ニ譲リ、罪ハ己ニ沾フテ至誠ヲ以テス、独人事ヲ尽シ、手

ヲ引キ引カレテ大道ヲ往来セスンハ、天下治マルヲ得ス、然シテ土・肥其他随テ功舉ルヘシ、小生

心事大久保・川村能ク承知之事故、御聞取可被下候、御前方御下向、邦家興廢存亡之秋ト、御尽力之程朝夕奉祈候、併急ニ御成業六ヶ敷事々物々、其数滿テ又万物生ス、丈夫只道ヲ楽ミ、青天ヲ仰クトノ事有之、何分宜敷御諒察被下置、信義上下ニ貫徹シ、万民安堵仕ル様偏ニ奉懇願候、恐々敬白、

庚午十二月五日

黒田清隆

岩倉公閣下

二 伸、小生事、歐羅巴並支那へ差遣れ候、来月二日より出発ノ積ニ御座候、是迄御前方へ屢建議シタル事而已只氣ニナリ、跡ニ残り返すも邦家之為メ御尽力奉祈候、

一 榎本釜次郎御所置、是非死一等ハ御宥免之処、是又奉懇願候、以上、

九四八

藩庁岩倉具視下向ニ付警衛奉迎方ヲ達ス

明治3年(1870)

十二月十五日

藩庁、大納言岩倉具視勅使トシテ下向ニ付、其警衛奉迎方ヲ令ス、

一此節岩倉大納言殿、御下向之御模様ニ付、御着之節中途御警衛向等左之通、

一客屋江御滞在、

一御着之節、津畑江民事奉行・生産奉行・書記其外出役之面々、立宿可致手当候、

一御上陸之節諸差引之儀、民事奉行・生産奉行・書記受持、

一御足次船手当、生産奉行受持、

一御中途御馬之節は、内厩役受持、其外勤方別段申渡置候、

一民事奉行其外出役之面々平服、

一津畑より御立宿並御旅宿迄は、檢事四人・足輕召列御先払、

一津畑取締向監察局受持、檢事出役、

一津畑御立宿江御行掛御立寄、夫ヨリ客屋江御着、

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年午十二月十五日

知政所

九四九 勅使下向ニ付、民事局外五局へ接待方ヲ

令ス

十二月十五日

勅使下向ニ付、民事局外五局へ接待方ヲ令ス、

一民事局・会計局・軍務局・監察局・糺明局・内務局

右は此節、

勅使御下向付ては、何篇昨年

勅使御下向振合を以、御手当向其外得差図候儀は其通

ニて、万端無手拔様可取計旨被 仰渡候条可申渡候、

明治三年十二月

知政所

九五〇 藩庁勅使岩倉具視来藩ニ付、一般ニ達シ

戒飭セシム

十二月十八日

藩庁、大納言岩倉具視勅使トシテ来藩ニ付、一般ニ達シ

テ戒飭セシム、

九五〇ノ一
一岩倉大納言殿

勅使として御下向、今日被為在御着、客屋江御一泊、

明日より御城内江御滞在之筈候条、御出立其外御出之節、御通路筋江罷出候面々は、屹と致躊躇、聊不敬之儀とも無之様可相心得候、此旨向々江申渡、末々江は支配頭・主人等より可被申渡旨可申渡候、

明治三年午十二月十八日 知政所

九五〇ノ二

吉井三峰日記

十二月十八日

村田新八入来、岩公十日ニ西京御立、西国へ御下向ノ由ヲ聞ク、

九五〇ノ三

道島正亮日記十二月十八日

一岩倉少将、午十二月十八日昼時分夷船ヨリ着帆、客屋

へ被為入、廿日ニ

勅使ノ由ニテ、御休息所へ被為入候由、大久保市蔵・

川村與十郎付添罷下候由、

但

長州ノ山縣、モ參ル筈ノ噂有之候処、岩倉モ長

州へ被差越、夫ヨリ被參候由ニテ、長州藩知事モ

跡ヨリ被差越筈ノ由、イマタ子細不相分候、

九五〇ノ四

寺師宗道日記十二月

同十八日 晴

出席候、四ツ時分船見候迎、人奔走之体也、頓て御着之由、岩倉大納言殿、更ニ木戸參議・山形參議・大久保參議ニ川村兵部大丞着被成候由、岩倉殿は客屋へ御入候、

勅使之由候得共、表通之訳ニは無之由、夫故殿中へ御出は無之由、蒸気船二艘ニテ候由也、莊十郎来ル、小濱次兵衛方より代錢四百貫文、昨日より兩度ニ受入、内百疋貫此方より受取、其余伊助方へ式百三拾貫貸ス、内式拾疋貫ハ引て返却之賦也、其余分は莊十郎・市來氏兩方へ配当ス、

九五〇ノ五

鹿兒島県士族

川村純義

与十郎

天保十二年庚子正月生

中略

同年明治三年十二月十八日

一 般岩倉大納言、鹿兒島・山口兩藩へ為勅使下向ニ付、
附添被 仰付候事、
以下略ス

九五〇ノ六

五日、孝允東京ヨリ至リ、利通ト共ニ具視ニ謁シテ、
使事ヲ商議ス、十日具視京都ヲ発シ、大坂ニ抵リ、三
橋楼ニ館ス、利通・孝允・山縣有朋・河村純義來リ謁
ス、十二日具視利通・孝允ト共ニ、練兵ヲ大坂城趾ニ
閲シ、兵学寮及病院ヲ巡覽ス、十五日具視利通・有朋・
純義ト蒸氣船ニ駕シテ、大坂海ヲ発ス、十八日鹿兒島
灣ニ抵ル、藩庁ヨリ小蒸氣船ヲ以テ來リ迎フ、具視上
陸シ客館ニ入ル、島津忠義・西郷隆盛迎謁ス、島津久
光病ニ臥スヲ以テ、其家人兒玉五平代リ其勞ヲ謝ス、
「附注」十二月二十一日、具視鹿兒島ニ在リ、書ヲ實
美等ニ贈リ、藩内ノ事情ヲ報道ス、其文ニ曰ク、
当藩士來ル二十三日崎陽へ陸行、夫ヨリ飛脚船ニテ
東上之旨、只今承候ニ付、急キ短札内々各位迄申入
候、
一 十五日大坂出帆十四日ト申上置候得、
共、風波強ク延引候、海上四日、即十八
日鹿兒島着港、風波モ平穩之方ニテ、同行大久保

始メ何レモ無異壯健、乍憚御放念可給候、

一 旅館之手当、日々之仕向言計ナキ丁寧之事ニ候、
一 速ニ勅使可相勤之処、甚恐入候事ニ候得共、近日
持病ノ頭痛強キ方ニテ、困居候処、押テ乘船平穩
之方ナカラ、全ク船氣軟着港ヨリ不工合平臥、不
得已延引仕候、併追々宜敷候間、來二十三日入城
相勤候筈ニ決シ申候、二十四日・二十五日社參、
練兵一覽等仕、二十六日發途、山口參向心得ニ候、
一 扱十八日ヨリ今日迄、大久保始日々相往来、藩情
承候処、世上紛紜之説ハ全ク虚談ニ候、尤兵隊壯
年之者杯ニハ、随分暴言ヲ発シ候者モ有之哉ニ候
得共、藩庁ニテハ何事モ無之、殊ニ西郷ノ如キ、
実ニ朝廷之事天下之儀ヲ憂苦罷在、是非長・土等
同心合力不致ハ、百事去ルトノ見込ニテ、当世之
人傑タル事不可有相違、感心之事ニ候、附テハ未
タ勅使不相勤前、何共難申上候得共、今度ハ勸慮
之旨全ク貫徹無疑ト推量候、偏ニ西郷兄弟・大久
保・河村等之尽力ト存候、此段不取敢一筆申入候、
尚山口ヨリ表向言上迄、各位限御内分ニ願上候、
仍テ早々如此候也、

十二月二十一日

具視

明治三年午十二月廿日

知政所

三條殿

徳大寺殿

正親町三條殿

尚々小生病氣、尤持病而已、決テ御案シ給間敷候、余リ延引相成候御断ノ為、無抛申入候事ニ候、且今度之事実ニ如何ト御懸念之御事ト、御心中令遠察候ニ付、形行有之俟、只一筆申入候而已ニ候也、

九五二 岩倉具視鹿兒島城内滞在ヲ辞シ客屋滞留

ニ付ソノ旨ヲ藩内ニ令ス

十二月二十日

岩倉大納言、鹿兒島城内滞在ヲ辞シ、客屋ニ滞留ス、因テ藩中ヨリ一般ニ之ヲ令ス、

一勅使岩倉大納言殿御下向、客屋江御一泊

御城内江御滞在之筈候旨被 仰達置候得共、右は御辞

退ニテ、当分客屋江御旅館被為在候条、可承向々江可

申渡候、

九五二 藩庁勅使登城ニ付、歡迎並警衛方等ノ準備

手続ヲ令ス

十二月廿二日

藩庁勅使登城ニ付、歡迎並ニ警衛方等ノ準備手続ヲ令ス、一此節 勅使御下向、来ル廿三日

御本丸江被為 入筈候付、御次第御手当左之通、

一当日十字客屋御旅館江為御迎、

從四位様御衣冠ニテ被遊 御出、御先立ニテ 御本丸

江被為 入候事、

但大参事・権大参事之間隨從、

一勅使御乘輿、

但内務局受持、

一御道筋御旅館御門より御出、客屋本門通、伊勢健彦屋敷角より舩形学館前、兵士学問所脇、二之丸下 御通

行、

御楼門より、摒重御門御対面所御輿台より御上り之事、

但勅使御供方扣所杉之間、差引書記、

一右之節御樓門外より、道具方頭空焼相勤候、

一御樓門橋涯江大参事・権大参事・監察總裁・伝事・監察書記伺候、

一諸所掃除方、盛砂、飾桶等宮繕奉行受持、

一御中途警衛辻堅檢事、

但取締向都て監察局受持、

一御行列前後江檢事拾人、足輕召列、

一勅使神前ノ座設台一脚、其上鋪置二枚

拜殿 勅使ノ座鋪置二枚、其上鋪置、

勅使弐城内、藩知事先導神社参着、次知事先昇拜殿前、

神前告

勅使参向此間勅使、了着座拜殿、次

勅使直ニ前向神前参拜、祈誓了て就座拜殿、次神主從

傍前奉玉串、次

勅使前拜殿中央自分拜礼、次知事如初先導下階、

勅使繼て出、警衛可相勤候、

一勅使 御書院江御着座、

從四位様御休座、此時御茶・御菓子・御熨斗上ル、侍

直勤之、

一勅使御対面所江御出座、此時

從四位様御中段ニて御平伏、御意有之御拜請、

一右之節御座末江大参事以下平伏、

一右畢て 勅使御書院江御復座、夫より 照國神社江

勅使被遊御勤、神前江御備物被為在候付、 從四位様

被遊 御奉持御先立、御道筋御樓門 御出、社殿御神

前迄御先立、御着座等之次第、神前御式別紙之通、

一勅使門退出之節、御出之通

從四位様御先立、客屋御旅館江御送被遊候て、当日之

御礼被 仰上候事、

一照國神社江 勅使御勤之節、大参事・権大参事・監察

總裁・伝事・監察書記社内庭上江伺候、

一同日於 勅使御旅館御料理御進上之事、

一当日出役之面々都て改服、

一勅使江被遊被進物、家令受持、

一御逗留中御馳走向朝夕之御膳等、諸財掛出納奉行・書

記・膳所頭受持、茶・煙草盆等道具方受持、

右之通於向々致手当、得差図候儀は其通ニて、諸事

致急埒候様可取計旨、向々江可申渡候、

明治三年十二月

知政所

九五三 勅使練兵閱覽アルコトヲ令ス

十二月廿三日

勅使練兵閱覽アルコトヲ令ス、

九五三ノ一

一岩倉卿御儀、来ル廿五日八字、客屋御旅館より御出、

客屋本門前通、伊勢健彦屋敷掛角より枳形学館前御通、

御成御門より軍務局江被為 入、兵隊点檢之式御覽之

上、練兵場江御出、大隊操練被遊御覽、畢て

御出之節通御帰、尤 從四位様ニも右刻限前以、軍務

局江被為 入、御同様 御出之筈候条、御手当等都合

能取計候様軍務局江申渡、可承向々江も可申渡候、

但御茶・御煙草盆・御菓子等、内務局道具頭方受持

ニて可差上候、

明治三年午十一月

知政所

九五三ノ一

寺師宗道日記十二月

同廿五日 雨天

出席候、今日練兵場ニて大隊調練有之、岩倉卿御覽被

成候、布屋出来候、出張局当番也、木脇次郎右衛門ニ

書状、十六日・廿二日付兩道也、^(A47)出張局御番也、

九五三ノ三

此月^{十一月}具視歩兵四大隊・大砲四座ノ操練ヲ觀ル、大

隊長ハ野津七左衛門^{雄鎮}・篠原冬一郎^{幹國}・種田健一郎^{明政}・

桐野半二郎^{利秋}ナリ、具視諸隊ハ酒七石・青魚^{カマス}鱸五石ヲ

贈ル、其書翰ニ曰ク、

具視奉命西下中、今日奉値先朝御正辰候ニ付、感慨

之余、愚意尊卿迄申進候、抑先朝頻年被惱叡慮候事、

偏ニ被期攘夷候儀ニテ、衆庶之所遍知候、然ル処、

宇内之形勢御洞察被為在、兵庫開港勅許云々御沙汰

有之候末、今上断然被為繼遺勅、神武創業ニ被為基、

今日之御盛挙ニ被為至候儀、実以未曾有之大御变革

ト存候、全貴藩多年軼掌之所致、今更申迄モ無之事

ニ候、今般具視為勅使深重叡慮趣申伝候処、貴恙未

タ愈スト雖、速ニ奉命之御次第至復命候ハ、叡感

不淺ト恐察此事ニ候、於具視モ唯々感喜不知所言候、

且又今日觀兵、実ニ進退精練可驚候、具視雖不識其

術、一点間然スル所ナキモノト相寛申候、是則海外

列國之輕侮ヲ防禦シ、億兆ヲ保護スル第一之要具、

皇威更張之基本ニシテ、尊卿始平生御奨励御行届之

所令然ト、為朝野欣悦致候、自今弥益御鼓舞有之候

ハ、一層之進歩ト是亦所希望候、今日偶然奉値先朝之御正辰候ニ付、古往今来不能無感慨候、就テハ日ヲトシ杯酒ヲ設ケ、衆兵士ト快飲セント欲スルモ、旅装匆卒、発途在近候間、濁酒・乾魚聊表愚衷候迄ニ令贈進候、宜敷御取計被成下候ハ、幸甚之至御座候、書不尽言、匆々頓首、

十二月二十五日

具視

島津老卿閣下

九五四 勅使入城島津久光代忠義勅書ヲ拝受ス

十二月廿三日

勅使入城アリ、久光公病氣ニ付、忠義公代テ勅書ヲ拝受シ、尋テ勅使ハ照國神社詣テ、御添書ト共ニ御劔ヲ進獻セラル、
九五四ノ一 一勅使岩倉大納言殿を以、今日

從四位様御名代ニテ、

從三位様

宸翰御拝戴、畢テ 照國社江

勅使御参向、 御劔一口 御添書を以、 御進納被為

在候付、嶋津珍彦殿一列・八等官以上、明廿四日四ツ時、

宸翰並御添書拜見被仰付候付、御次第左之通、

一 御対面所御上段江、

宸翰並御添書相備、珍彦殿一列・八等官以上拜見被

仰付候、

一 拜見之節は五人計宛相進、無混雜様拜見可仕候、

一 右之通拜見之上、

從四位様 從三位様江御祝儀之儀は、別段於席々可被

申上筈候得共、御座支ニ付、於拜見席被申上候筋被仰

付候、

一一 統拜見濟退出之節は、

照國神社江参拜恐悅可被申上候、

一大 参事初席詰之儀、 御出座之節通ニテ、監察可致差

引候、

右之通、向々江不洩様早々可致通達候、

但軍務官人数戎服、其外改服、

明治三年十二月廿三日

知政所

九五四ノ一

道島正亮日記十二月廿三日

一岩倉殿 御登城、 知事公御迎ニ客屋へ御出、御先立

ニテ御城へ被爲入、

勅書イマタ不相分、 順聖公へ正一位ノ御贈位誤聞、

御神劍一口

朝廷ヨリ御頂戴ニテ、岩倉公御退城ヨリ照國社へ被爲

入候由、

九五四ノ三

寺師宗道日記十二月

同廿三日 晴

今日

勅使 御登城、

御拜聴之由也、 照國社へ 御劍被納候由、且ツ

御宸翰被下候由(以下省略也)

九五四ノ四

二十三日午前十字、忠義衣冠ヲ着ケ、客館ニ就テ具視

ヲ迎フ、具視亦衣冠ヲ着ケ馬ニ騎リ、鹿兒島城ノ本丸

ニ臨ム、忠義前導ス、具視書院上段ニ着座、忠義中段

ニ拜伏ス、具視之ヲ召シテ勅書ヲ授ク、其文ニ曰ク、

朕忝ク大統ヲ継、夙夜憂勤、惟恐皇紀未張万姓未安、

前途之業実不容易、朕深苦慮、汝久光朕力股肱羽翼

ナリ、宜朕力不逮ヲ助、左右群臣ト同心戮力、皇業
ヲ贊成シ、朕ヲシテ復古ノ成績ヲ遂シメヨ、今大納
言具視ニ勅シテ、朕カ意ヲ告、其レ欽テ之ヲ聴ケ、
具視勅書ノ旨趣ヲ演舌ス、其覺書ニ曰ク、

近頃大儀ニ被思召候得共、勅書之通り速ニ出府、廟
堂ニ於テ万機都テ輔佐可有之候、抑御一新以来、夜
白御苦慮被爲在候得共、上下之情態齟齬ヨリシテ、
百事紛々之義モ不少、殊ニ宇内之形勢不容易義ハ、
衆庶ノ議スル所也、此時ニ当リ区々之物議ニ関シ、
徒ニ時日ヲ費シ、時機ヲ失シ候テハ不相濟義候、実
以テ一日モ不可忽時ト、深ク御憂慮被爲在、強テ御
依頼東上之事被仰下候、元来先代故薩摩守、夙ニ朝
廷ノ恢復ヲ謀リ、亦遠ク外国ノ大患ヲ慮リ、数年辛
苦ノ処、中道ニシテ薨去、御遺憾千万ナガラ、無是
非事ニ候、雖然御父子専ラ其遺意ヲ継キ、遂ニ薩・
長二国同心戮力、今日ノ如ク数百年來之恢復ニ至リ
候事、而藩父子ノ報国至誠ニ非スシテ何ソ、而藩志
士ノ忠勇ニ非スシテ何ソ、然ハ則而藩ハ王室ノ羽翼、
国家ノ柱石タルコト不待論也、依之是迄毎々被爲召
候儀ニ候処、病氣不得止今日ニ押移候得共、件々御

沙汰之通、前途之事弥多事、益大事ト頻ニ御苦慮被為在候ニ付、於今度ハ是非奉命有之候様、懇々可伝述旨御沙汰候事、

但前条ニ付テハ、是モ毎々被為召候通、御用有之候間、西郷大参事必随從可致候、尤本人ヘモ別段御沙汰之旨可演舌候事、

具視照國神社ニ参向シ、御劍ヲ奉納ス、其儀注ニ曰ク、

照國神社勅使参向次第

勅使発城内、知藩事先導、

次勅使参着於社頭、知藩事昇拜殿、直進於神前告勅

使参向之由、訖着座北上面

次社司直進於神前開扉、昇下神座於拜殿、

此間知藩事以下面伏、

次勅使進立於階下、

次祠官立八脚案於神座前、

次社司供御劍於案上、

次勅使進向於神座前拍手再拜、祈誓国家興隆之事、

此間知藩事以下面伏、

次勅使着座北上面

次社司復神座於殿内、

此間知藩事以下面伏、

次社司供勅使之幣物、

次勅使進於拜殿中央、拍手再拜自分拜也

次知藩事以下拍手再拜、

次勅使退出、知藩事先導如初、

九五四ノ五

今般不凶モ

勅使御下向、

宸翰拜戴被

仰付、不肖愚昧之臣別て恐縮至極奉存候、就ては病体

勉疆仕、来春中

闕下ニ拝趨仕、奉謝深重之

天恩度奉存候、此段御請申上候間、宜御執奏被成下度

奉伏願候、敬白、

十二月二十四日

島津久光

九五五 島津久光岩倉具視ニ勅書ノ請書ヲ奉呈ス

十二月廿四日

久光公病ヲ扶ケ、岩倉具視ノ客館ニ来リ、勅書ノ請書ヲ

奉呈ス、
九五ノ一

二十四日、久光病ヲ扶ケ、具視ノ客館ニ来リ、勅命ヲ辱フスルヲ謝ス、具視亦久光ヲ訪問シ、慰諭シテ旃ヲ勉メシム、二十五日、具視手書ヲ久光ニ贈リ、其東上ノ期ヲ愆マラサランコトヲ諭ス、其文ニ曰ク、

一兩日ハ、烈風殊ニ嚴寒候、愈御安全欣然候、誠ニ昨日ハ来臨、御沙汰之趣御請御礼等御演舌之旨、何も承知仕候、然ル処久々御病弱ニテ、今以御全快ニ至リ兼、兎角御困難ニ付、暫時御猶予御願被成度旨、勿論深厚之叡慮、勅使之重キ謹テ御拝戴、所謂不待駕テ行之儀ニテ、臣子之分迅速御奉命可被成ハ当然之事ニ付、頻ニ御痛心ニハ候得共、何分前条不得已之御次第ヲ以、訳テ御示談之趣、具視ニモ千万御推察ハ申入候得共、愚意申述候通、兼テ宸意被為在候処、又從來三條始同僚中、頻ニ御出府懇願之儀ハ、既ニ廟議決スル所ニ候間、只々御猶予ト而已御歎願有之候テモ承諾難致、具視雖愚昧、以勅使遙ニ西下空敷引取候事ニテ、復命之致方モ無之、進退維谷リ候仕合ニ依リ、肺肝吐露御談申入候処、深く御熟察ニテ、即今速ニ御奉命、来春御発途御東上之旨、乍

去其内御病体ヲ以、少々延引モ難計段兼々御断置等之事、以御直書御奉答可被成トノ義、先以為天下大幸此事ニ候、於具視一分ハ欣然候、其末御病症ニハ、寒氣之候殊ニ御困リニ付、来春三月末御発途之儀ニ、御内決之処ハ、則御含申候事ニ御座候、然ルニ御帰城後熟考候処、誠ニ縷々御懇談、彼是御推察申入候テ、今度其所詮無之テハ、最早身上モ是迄限之事ト、彼是苦辛、前後ヲ願ルニ不違、即席前条之通御相談決シ申候事ナカラ、来三月ト申辺差合候儀、百日モ遷延候儀及復命候テハ、御気色如何ト、頗ル懸念仕居候程之事ニテ、来三月御東上之儀ハ勿論ト存候得共、御咄之通今ヨリ一層之御加養有之、誓テ御奉命之通御相違無之処、懇禱仕候、尤御直談ニテ、断然御内決申候儀、今更女々敷彼是申入候モ、失礼ニ存候得共、若シ其期ニ臨ミ、尚御所勞難復常節ハ、今二ヶ月或ハ秋迄御猶予之儀云々御内話候、是ハ其節御答申候通、人ハ病之器ニテ、壮年之者ト雖、臨時之儀ハ別段之事ニテ、兼テ議スル所ニ無之、只具視一分ニ御咄ハ承候得共、相合候坏之儀ハ不存寄候、何分三月之処、是非御勉強御発途有之候様、呉々申

入置候事ニ御座候、万々一右一時之御咄行違、其時

ニ至リ、具視へ兼テ箇様々々申入置候杯ニテ、御延

引等有之候テハ、誠ニ大事ヲ誤リ候訳ニテ、尊卿之

御臣分モ不立、具視勅使之廉モ不立而已ならず、

表面条理スラ相立候へハ、面目ニ不拘事ト、曖昧虚

飾ヲ以現場ヲ塞キ、其実ハ恐多モ上ヲ奉欺候様之義

ニ陥リ候テハ、実ニ恐縮至極、天下ニ対シ無申訳儀

ニ付御応接之次第、為念一応申入候事ニ御座候、過

日モ申入候通、此度奉勅發途之上ハ、決心罷在候儀、

時日之遷延ハ更ニ厭ヒ不申候間、御談被成度廉モ候

得ハ、何時ニテモ参上可仕、又具視モ今一応得拜顔

候ハ、本懷此事ニ存候、仍テ一筆如此候也、

追テ今朝御請書、正ニ令落手候、将昨日御内話申

入候通、

叡慮之被為在候処ハ勿論、三條ヨリモ今度尊卿御

出府ニ付テハ、国論一定云々被申越候、今朝西郷

ヲ招キ、昨日御請之次第、且前後申入、万端御談

決ニテ、荒増之処致承知度ト申入置候間、是又宜

敷願入候也、

十二月二十四日

具視

島津老卿閣下

九五ノ二

一此節

勅使を以

從三位様

宸翰御拜戴被為 在候ニ付、

御別紙之通 御受被 仰上候段、被 仰達候条、一統

江奉承知候様面々江可申渡候、

十二月二十六日

知政所

九五ノ三

寺師宗道日記十二月

同廿六日 晴

泊り明ケ也、八ツより退出候、今日岩倉卿集成館御入

之筈也、

九五六 勅使ノ發途ヲ示シ、其時日ヲ沿道ニ達ス

十二月廿六日

勅使ノ發途ヲ示シ、其時日ヲ沿道ニ達ス、

一勅使岩倉大納言殿、明後廿八日朝八時客屋御出立、

一勅使岩倉大納言殿、明後廿八日朝八時客屋御出立、

御成御門より石燈爐通御通行、同所御渡戸より

御乗船、福山江御渡海、別紙之通 御休泊被遊御通行
候条、追々布令之通、諸事無滞様可取計候、尤御渡戸
迄御供廻並取縮等之儀は、

御光着之節通被仰付候条、向々江早々可致通達候、

但御小休之場所は、地頭見計を以可致手当候、

明治三年午十二月

知政所

(別紙)

一廿八日 福山御着船御一泊

一廿九日 下荘内御昼

一廿九日 上三俣御泊

正月朔日

一二日 去川御昼

一二日 高岡御泊

十二月廿八日

九五七 岩倉勅使其従士北村繁ヲ久光・忠義ニ遣

ハシ、淹留中ノ款待ヲ謝ス

十二月廿八日

岩倉勅使上程ニ先チ、其従士北村繁ヲ久光・忠義ノ両邸

ニ遣ハシ、淹留中ノ款待ヲ、口頭ニテ謝セシム、
九五七ノ一

而シテ隆盛客館ニ来リ、具視ニ謁シテ曰ク、従三位父

子並ニ藩庁重職等、勅旨ヲ奉戴シ、同心戮力益ス以テ

報効ヲ図ランコトヲ盟フ、先ツ臣隆盛ヲシテ、東上命

ヲ待タシム、二十六日具視製鉄所及紡績所ヲ巡覽ス、

二十八日具視鹿兒島ヲ発ス、忠義客館ニ来リ、之ヲ送

ル、具視上程ニ先チ、従士北村繁ヲ久光・忠義ノ邸ニ

遣リ、淹留中ノ款待ヲ謝セシム、口上書ニ曰ク、

此度大納言儀、為勅使下向ニ付、滞在中前後厚御取

扱相成、深辱被存候、今朝発途ニ付、右御挨拶可申

入旨被申付候、以上、

岩倉家

十二月二十八日

北村 繁

九五七ノ二
別紙日記ニ曰ク、

発途以来日次之記

十二月十日、十字発西京、同夜七字大坂着之事、

同十一日・十二日・十三日等、於旅館大久保・木戸・

山縣・河村度々出会之事、

同十四日、出帆之処、風波強ク延引之事、

同十五日、八字乗船発浪華、十六日・十七日ニ至リ

渡航之事、

同十八日、十二字鹿兒島着港、自是同地滞在之事、

同十九日ヨリ廿二日ニ至リ、具視持病頭痛、且依船

暈平卧之事、

同廿三日、勅使之儀万端無滞相動候事、

但父子へ申達之後、大少参事始一同へ御趣意之次

第、並條公ヨリ懇篤御示諭之趣等申伝候事、

同日、一字照國神社参拜、是亦無滞相動候事、

同廿四日、十字島津從三位勅誥為御請旅館へ出頭、

緩々談話之事、

同日、二字父子之邸へ自分之礼ヲ以テ、訪問之事、

同廿五日、六字從三位家令出頭、從三位自筆御請書

兼春出府 持参之筈之処、兎角所勞不相勝ニ付、以家令

差出候旨、入魂申出令落手候事、

同日、七字西郷大参事相招キ、前途之儀尚又万端申

入、頗ル懇談ヲ尽候事、

同日、九字練兵一覽之事、

同日、四字西郷更ニ出頭、父子始藩庁一同遂評議、

謹テ御沙汰之趣奉戴、為朝廷為天下自今一際勉勵
尽力可仕、随テ西郷大参事、勅使ニ随從出府之旨
申出候事、

同廿六日、製鉄所及紡績所一覽之事、

同廿七日、休息之事、

同廿八日、十一字発鹿兒島、同所内海渡航福山着、

同所止宿之事、

同廿九日、発福山至上三保止宿之事、

正月元日、上三保滞在、新年慶賀之事、

同二日、発上三保至高岡止宿之事、

同三日、発高岡至高鍋止宿之事、

是日佐土原支配地ニ入ルヲ以テ、知事礼服ニテ出

頭先奉伺天機、大参事始出頭同断之事、

同四日、発高鍋至細島止宿之事、

是日秋月支配地ニ入ルヲ以テ、知事以下出頭、如

佐土原藩知事、自是先キ三日朝、西郷兄弟・大久

保・山縣・河村等発鹿兒島、当港へ今夕到着之事、

同五日、七字一同乗船細島出帆ノ事、

同六日、五字至防州三田尻上陸、問屋口止宿、木戸

出迎之為出頭之事、

同七日、七字出發、終宿ニテ昼食ス、同所へ毛利知事出迎、

四字山口旅館到着、毛利從二位父子出迎トシテ出頭之事、

同八日、休息之事、

同九日、十字勅使之儀万端無滞相勤候事、

但父子へ申達之後、大少參事始一同へ演舌如鹿兒

島事、

同日、一字豊榮神社へ参拜、無滞相勤候事、

同日、十字毛利從二位勅詔為御請出頭、自筆之御

請書當春出府持参令落手候事、

同十一日、十字練兵一覽之事、

同日、二字從二位父子へ自分之礼ヲ以テ訪問之事、

同十二日、八字高杉權大參事出頭、父子一同遂評議、

御趣意之旨奉戴云々、鹿兒島藩之通ニ候事、

同日、故錦小路墓へ微行参詣之事、

右公私混淆言上恐入候得共、今日迄之荒増如此候、

大御趣意巨細之廉ハ、別紙ニ申入候通ニ御座候、且

勅使取扱、兩藩共父子送迎來訪、旅館警衛其外行届、

恭敬ヲ被尽候事ニ候事、

具視三田尻ヨリ航シテ大坂ニ赴ク、
略ス
○以下

九五七ノ三

大久保利通日記十二月

略
○上

十九日

一勅使御旅館江出頭、昼后桂家・老西郷・大迫子等入来、

二十日

一勅使御旅館江出頭、二丸公就御所勞、御猶予ノコト願

出、西郷子退出ヨリ入来、信吾子モ入来、初テ老西郷

ト示談、及其議無異論、

廿一日

一勅使江出頭、川村子モ入来、同行訪西郷氏、入夜帰、

廿二日

一勅使江出頭、内情云々ノコトヲ具ニ言上、委曲御聞取

ニテ候、今朝桂氏江モ訪候ハ、西郷氏先行云々ノコ

トヲ談ス、昼后西郷氏入来、猶又見込ノ処及示談候処、

尽ク同意安心此事ニ候、方略ハ十分相定リ、此上ハ二

丸公御受ノ有無ノミニ有之候、

廿三日

一 山縣少輔・中井子入来、勅使御内使原氏入来、今日退出ヨリ(以下欠字カ)

廿四日

一 今日於城内 勅使御達命、知事公御名代トシテ御承知被為在候、桂氏退出ヨリ入来云々承ル、

廿五日

一 二丸公為御礼 勅使御旅館江被為入候、昼后 勅使御旅館江参上、今日御応答之形行拜承、先々宜鋪御都合ニテ、大幸ニ候、春中御上京御請ノ旨ニ候、出殿ノ上桂家江参ル、西郷氏モ入来、二丸公江拜謁細事相伺候筋也、

廿六日

一 昼后西郷子入来、二丸公江相伺候処、少々曖昧ノ趣有之、尚又 勅使江可申上哉示談ニ付、巨細申上候テ、今一応御対顔奉願候方可然ト談シ候、桂家モ御出、四字頃 勅使江参上云々申上、明朝二丸公御出ノ筋ニ被決候、

廿七日

一 今朝四時二丸公江謁ス、勅使二丸江御出被為在候、桂家入来、川村子入来、同行訪西郷氏、

廿八日

一 勅使就御発途参上、十字 御立、山縣旅宿江訪フ、昼(冬一郎)后野津子・篠原子(左門)・種子田子入来、肥藩莊村入来、

廿九日

一 今朝訪西郷氏、

○以下略ス

九五八 鹿兒島藩士種子田清一外三名ヲ勤学ノ為

メ米国へ差遣サル

十二月三日

鹿兒島藩士種子田清一外三名ヲシテ、勤学ノ為メ米国へ

差遣サル、

十二月三日

御沙汰書写

中略

山口藩

山尾常太郎

鹿兒島藩

各通

種子田清一

同

最上五郎

農業勤学トシテ、米国へ差遣候事、

○以下略ス

九五八ノ二

十二月三日

御沙汰書写

中略

鹿兒島藩

二木彦七

各通

山口藩

來原彦五郎

鉾山勤学トシテ米国へ差遣候事、

九五八ノ三

鹿兒島藩

田尻稻次郎

佐賀藩

大塚綏次郎

右は当校寄宿生徒之処、洋行御達之趣、当人共突然申出、承知いたし候得共、当校江は一応之御打合せ無之、

且前段御達も無之事ニ付、此末同人共洋行ニ付、諸事取扱之儀、於当校は如何相心得可申哉、此段相伺候也、

庚午十二月九日

大学

弁官

御中

追て、以後当校生徒之内洋行等之儀は、其段前以委細御打合之上、御取計有之度、為念此段申上候也、

九五八ノ四

田尻稻次郎

大塚綏次郎

右此節洋行被 仰付、突然其校届出候由ニテ、打合モ無之、諸事取扱之義如何可相心得哉、右ハ政府御撰拳ニテ被仰付候間、諸事取扱方当官ニテ取計候間、其旨御承知有之度、且ッ兩人江モ其段被仰達度、此段御達申入候也、

庚午十二月九日

弁官

大学

御中

猶々御校生徒ニ付、洋行被 仰付旨、則可相達之処、前以略加藤大丞迄申入置、

其故御達後レニ相成、勿論已来ハ御申立之通可取計候也、

庚午十二月五日

^{九五八ノ五}別紙写之通、鹿兒島ヨリ伺出候ニ付、朱書之通御附紙

相成候間、為御心得御廻シ申入候、就テハ便船ノ節、

万端御世話可有之様、兼テ申入置候、

十二月十日

九五九 藩庁東目諸郷ニ作硝廠設立ノ計画ヲ令ス

藩庁陸軍局、東部五十九箇郷ニ、作硝廠設立ノ計画ヲナ

庚午十一月廿七日

弁官

サシメ、各郷ニ達シテ、其施設方ヲ稟申セシム、

外務省

寺師宗道日記十二月

御中

同十日 晴

九五八ノ六

種子田清一

今日諸郷へ、作硝廠等取立之届出等さし出候様、廻達

出ス、東目^{大隅六郡}諸郷五拾九ヶ郷也^{以下省略}

農業勤学トシテ、米国へ差遣候事、

(達文欠ク)

庚午十二月三日

二木彦七

鉱山勤学トシテ、米国へ差遣候事、

庚午十二月三日

十二月十日

九六〇 皇族・旧堂上・華族及ヒ旧官人以下ノ禄制ヲ定メ、地方貫属タラシム

田尻稻次郎

国法・民法勤学トシテ、米国へ差遣候事、

皇族・旧堂上・華族及ヒ旧官人以下ノ禄制ヲ定メ、其采地ヲ収メ、給スルニ廩米ヲ以テシ、悉ク各地方ニ貫シ、非蔵人・北面人・執次・使番・使丁等ノ称ヲ廢シテ、士

族・卒二等ト為ス、又皇族・華族ノ臣隸三世以上ノ者ハ、之ヲ士卒ト為シ、地方官ニ隸シ、二世以下ハ資ヲ給シテ、本籍ニ復セシム、

〔第九箇〕十二月十日（布）（太政官）

先般各藩大義名分ヲ正シ、宇内形勢ヲ察シ、其版籍ヲ奉還シ候ヨリ、大ニ公論衆議ヲ被為尽、更ニ知藩事ニ任シ、家祿之制ヲ始メ、士卒祿制ニ至ル迄被定候ハ、全ク府藩県一途ノ政令ニ帰シ、天下ト共ニ綱紀ヲ更張被遊度 御主意ニ付、猶又今般宮・華族^{元堂}並ニ旧官人以下一般祿制改正、別紙之通被 仰出候条、篤ク御主意ヲ奉体シ、各其分ヲ守リ其職ヲ可尽事、

（別紙）

〔頭註〕五年太政官第二十九号ニ依リ、卒ノ稱消滅
一華族之輩總テ地方官貫屬被 仰付候事、

一非藏人・北面旧官人・執次・使番・仕丁等ノ名称ヲ廢シ、都テ士族・卒ト被改、地方官貫屬被 仰付候事、

一宮・華族三代相恩之家士、都テ士族・卒ノ中へ御召加、地方官貫屬被 仰付候事、

祿制

〔頭註〕八年第三百二十八号布告ニ依リ消滅
一是迄家祿外賜米等、都テ四ツ物成ノ高ニ直シ、方今

御定ノ二分五厘ノ制ヲ以テ、自今現石ヲ以テ被下候事、

但当年ハ是迄之通、来末年ヨリ廩米ヲ以テ被下候事、

譬ハ

一元高五千石	現米千二百五十石
一同 三千石	同 七百五十石
一同 千石	同 二百五十石
一同 五百石	同 百廿五石
一同 百石	同 廿五石
一同 五十石	同 十二石五斗

但現米十二石以下是迄ノ通、

（参照）四年三月四日 東京府

別紙之通 御沙汰相成候条、此旨相達候事、

但領地高明細書取束之上、京都府へ可相廻事、

（別紙）

今般宮・華族^{元堂}並旧官人以下祿制被定、廩米ヲ以被下候間、是迄領地之分ハ、総テ上地可致候事、

但領地高明細書東京府へ可差出事、

庚午十二月

九六一 禄制改定ニ付宮・華族ニ諭達ス

十二月十日

禄制改定ニ付、宮・華族ニ諭達、

〔第九百〕十二月十日(口達)

宮・華族

後世 王室陵夷將門權ヲ握リシヨリ、徳川氏ニ至リ、

尊 王ノ大義ヲ表セリト雖モ、

朝廷虚器ヲ擁スル弁髦ノ如キ也、縉紳諸臣皆幕府ノ朱

印ヲ以テ家禄ヲ給シ、撰籙ノ門閥ト雖モ、小藩ノ家宰

ニ如カス、況ヤ小臣ニ至テハ、陪卒ニモ劣レルカ如シ、

貴族大臣救ヲ親戚ノ藩ニ仰キ、僅ニ家計ヲ為ニ至ル、

小家ニ至テハ、其貧窶窮困実ニ不堪見也、是天下ノ所

憫、志士ノ所歎、今ヤ 王政復古、大権 朝ニ帰シ、

縉紳文武ノ職ヲ執ル、俗情ヲ以思フニ、宜シク禄ヲ増

シ給ヲ加ヘ、主トシテ

朝恩ヲ蒙ル可キニ似タリ、然ルニ更始ノ際旧弊ヲ除キ、

大藩諸侯モ十分ノ家禄ニ減シ、諸士卒皆前禄セラル、

一新釐革更張ノ時、宜シク如此ナル可キ也、縉紳ノ如

キハ、 朝家近臣須ラク天下ニ先チ、 朝意ヲ奉シ、

自ラ其責ニ当ル可キ也、 朝廷爰ニ於テ内外同視、公

平無偏ノ処分無クンハ有ヘカラス、若 朝廷近臣ニ私

シテ、禄ヲ増シ給ヲ厚フセハ、前古覆轍ヲ招ク必然也、

今 朝廷華族禄制ヲ定ル、不得止儀也、諸臣宜シク

上意ヲ体認シ、自ラ反省其分ヲ守リ、勉勵尽力、其材

ヲ磨キ 聖業ヲ可奉扶モノ也、

九六二 諸藩海軍資金上納済大蔵省証印ヲ以テ兵

部省ニ開申セシム

十二月十四日

諸藩ヲシテ、海軍軍資金上納済ノミハ、大蔵省証印ヲ以

テ、之ヲ兵部省ニ開申セシム、

〔第九百一十二〕十二月十四日(達) (太政官) 諸藩

(頭註)「四年太政官第五百八十四ヲ以テ、海軍資金上納ヲ廢ス」

諸藩海軍資金上納済之都度々々大蔵省受取証印ヲ以、

兵部省ヘ可届出事、

九六三 諸藩海軍資金一季上納毎ニ、大蔵省ヨリ

兵部省ニ交付セシム

十二月十四日

諸藩ノ海軍軍資金一季上納毎ニ、大藏省ヨリ兵部省ニ之ヲ交付セシム、

〔第九百二十三〕十二月十四日（沙） 大藏省

〔頭註〕「四年太政官第五百八十四ニ依リ消滅」
諸藩上納海軍資金一季上納毎ニ兵部省へ可引渡事、

九六四 在藩知事・非役華族ノ天機伺及參事・属等ノ參朝ヲ止ム

十二月十四日

非常ノ節、在藩知事・非役華族ヲシテ天機伺ヒ、及ヒ在京參事・属等ニ於テモ、參朝ヲ須ヒス、在東京知事・非役華族所勞不參ノモノノ開申ハ、旧ニ仍ラシム、

〔第九百十二〕十二月十四日（太政官口達）

〔頭註〕「制度変更ニ依リ消滅」
非常之節在藩知事・非役華族、兼テ申付置候等之趣ヲ

以 天機伺、或ハ御用伺等ニテ、參事・属其外等罷出候儀ハ、以後不及其儀、尤在東京知事・非役華族所勞ニ付、不參届之為メ罷出候儀ハ、是迄之通候事、

九六五 藩庁大工日雇賃銀ノ定限ヲ定ム

十二月十五日

藩庁会計局、大工日雇賃銀ノ定限ヲ示シ、營膳方ニ其管理ヲ委ス、

一 大工賃錢、一時ニ付壹貫貳百七拾六文、八字五ツより同六貫四百文、六ツより同七貫六百七拾六文、六ツより無休八貫九百五拾六文、

一日用右一時ニ付、壹貫貳百四拾六文、四字五ツより同六貫貳百四拾文、六ツより七貫四百八拾六文、六ツより無休同八貫七百四拾文、

右は大工日用賃錢之儀、先般究置候趣有之候処、至此比無故過分賃錢相請取候由相聞得、依之改て今日より右之通相究候付、尔后究通より法外之賃錢不相受取候様、其支配之向より堅く可申渡候、於其儀は、譬は六ツ時より無休之賃錢相受取、現実ハ五ツ比より及遲參、究通之賃錢致受用候様之儀有之候ては、不可然事候付、右体之儀も無之様可申渡候、就ては諸人一統江右之趣御達より相触、御藩内營膳方計を以、賃錢之定旗表可致候、左候て乍此上万一大工日用より、過当之儀申出候ハ、不相払、早速其雇主より營膳方江申出候儀は其通にて、自然違犯之者は可及沙汰候條、旁取違無之様

可相達候事、

但

此以後米価今より格外高低いたし、不相当相見得候節は、其時機ニ応し時々取しらへ、營膳奉行より可申渡候、

明治三年十二月十五日

會計局

【参照】

寺師宗道日記

同十日 晴

玄米八斗三升九合、代銀貳百三貫四拾六文、石ニ付、貳貫三百目ツ、掛分込ル(以下省略也)

九六六 鹿兒島藩士川南門次郎ノ所属勤務指定ニ

関シ伺

十二月十五日

鹿兒島藩士川南門次郎ヲ以テ、宮内省御研並鑑定御用勤ニ付、所属勤務指定ニ関シ伺、

鹿兒島藩士族川南門次郎御研並鑑定御用被 仰付、依て老ケ年米五拾俵賜り、右勤中何れ之支配とも不定、

然ルニ今般別紙之通家族引纏願出候処、右請方ニ甚差支候間、宜敷御評議之上可然御取計可給、此段申進候也、

庚午十二月十五日

宮内省

弁官

御中

九六七 宮・華族ノ輩士族・卒相對抱ヲ止メ家人規則ヲ定ム

十二月十五日

宮・華族元堂ノ輩ヲシテ、士族・卒相對抱ヲ止メ、尋テ家人規則ヲ定ム、

〔第九百一十六〕十二月十五日(達)(太政官)

(願姓) 第九百五十九參書一

宮・華族元堂之輩、士族・卒相對抱之儀ハ、向後被停

候、尤是迄召抱居候三代以上之家士ハ、士族・卒之内

へ御召加へ相成、地方官貫属被 仰付候得共、三代以下之者ハ、各其旧籍へ可為復、若旧籍ニ難復者ハ可申出候事、

但府藩臬士族・卒之内、從來召抱候者、不召抱者ニ

限ラス、拝借之儀ハ被差許候ニ付、願濟之上家々
適宜之給祿ヲ以、可召遣候事、

一官家令之儀ハ、人撰之上御附可相成候事、

一宮・華族元堂上家人規則
〔頭註〕四年太政官第五百九十七參書

一家令 一人

一家扶 適宜

一家從 同

一家丁 同

右之通被定候事、

九六八 宮・華族ノ家来三代以下ノ者ノ出所・姓

名ヲ録上セシム

十二月十五日

宮・華族ヲシテ、其家来三代以下ノ者ノ出所・姓名ヲ録
上セシム、

〔第九百十七〕十二月十五日（達）（太政官）

〔頭註〕四年太政官第五百八十五ヲ以テ、復歸手当金ヲ定ム
今般宮・華族家来三代以下之者、其旧籍へ可為復旨被

仰出候ニ付テハ、相応手当金被下候条、出所・姓名並
ニ召抱候年限等、巨細取調可申出事、

但其俣拝借相願召抱候者、此限ニ非ス候事、

九六九 前田獻吉及高橋新吉西洋各国経歴願ニ対

スル弁官ヨリ外務省へノ稟申

十二月十八日

前田獻吉及ヒ高橋新吉共ニ西洋各国経歴願ニ対シ、弁官
ヨリ外務省へ稟申、

鹿兒島藩士族前田獻吉・高橋新吉儀、来未正月ヨリ三
十六ヶ月ノ間、西洋各国経歴イタシ度旨、願之通聞届
候間、免状之儀、例之通御取計可有之、尤年齢等之儀
ハ委敷取調、御省へ可伺出旨相達置候間、為御心得前
文申入候也、

庚午十二月十八日

弁官

外務省

御中

願書欠

九七〇 乾行艦乗組一統ノ賜暇鹿兒島藩知事出願

ニ付キ、兵部省ヨリ弁官へ稟申

十二月十八日

乾行艦乗組一統へ、鹿兒島藩知事賜暇ノ出願ニ対シ、兵部省ヨリ弁官へ稟申、

乾行艦乗組一統御暇被下候様、鹿兒島藩知事ヨリ云々申立願書、過日御差廻シ相成、致承知候、然ルニ当今乗組御登用ノ人物至テ些少、一時申立通り御許容相成候テハ、甚タ差支申候条、何分ニモ従前之通り被仰付置度、此段御沙汰可被下候、仍テ御差廻シ相成候右藩ヨリノ願書相添、此旨申出候也、

庚午十二月十九日

兵部省

弁官

御中

別紙御申出ノ通相達置候間、為御心得此段申入候也、

庚午十二月二十日

弁官

兵部省

御中

追テ御申出書及御返戻候也、

九七一 四條隆誥巡察使トシテ日田県差向ニ付林

清康ニ同行ヲ命ス

十二月十八日

陸軍少将四條隆誥ヲ巡察使ト為シ、兵ヲ率キテ日田県ニ赴カシムルニ付、林清康三ニ同行ヲ命セラル、

大阪府士族元鹿兒島

林源清康

中略

同年明治三年十二月

一今般四條陸軍少将、為巡察使日田県へ被差向候ニ付、

同行被仰付候事、

以下略ス

【参照】

十二月十八日

御沙汰書写

四條陸軍少将

近来浮浪之徒、豊後路辺各所ニ潜伏致シ、時々出没暴行ニ及候趣ニ付、為巡察使日田県へ被差向候、依之二中隊随従被仰付候事、

天保十四癸卯年正月生
謙三

但河野彈正少忠、兼テ為取締被差遣置候ニ付、打合可申候事、

兵部省大阪出張所

今般四條陸軍少將、為巡察使日田県へ被差向候ニ付、其省二中隊随從被仰付候事、

高屋兵部権大丞

今般四條陸軍少將、為巡察使日田県へ被差向候ニ付、同行被仰付候事、

鳥尾小彌太

同文

九七二 藩庁一門登城ノ節昇降口並控口ヲ指定ス

十二月十九日

藩庁ニ於テハ、一門登城ノ節、昇降口並控口ヲ指定ス、

島津珍彦殿(重富 忠鑑)

島津次郎(今和泉カ 忠欽)

島津美賀佐(垂水 實教)

島津又八郎(加治木 久宝)
島津圖書殿(宮之城 久治)

右登 城ノ節、上リ口並控所此内ノ通可被相心得候、

島津又吉(永吉 久壽)

島津 貫

島津元丸(都城 久寛)

右珍彦殿一列被仰付置候付、以來登 城ノ節、上リ口並控所右同様被仰付候、

右之通申渡、可承向々へ可申渡候、

明治三年午十二月十九日 知政所

九七三 野村盛秀ヲ日田県知事ト為ス

十二月十九日

野村盛秀(宗七)ヲ以テ、日田県知事ト為ス、
九七三ノ一

鹿兒島県士族

野村盛秀

宗七

中略

同明三庚午年十二月

明治3年(1870)

一任日田県知事、

以下略ス

九七三ノ二

十九日中略、長崎県知事野村盛秀ヲ、日田県知事ト為シ
略ス

九七四 藩庁神社境内ノ竹木等伐採スルヲ禁ス

十二月二十日

藩庁神社境内ニ入り、竹木等ヲ伐採スルコトヲ禁止セシム、

一御藩内諸神社境内江猥ニ踏入、竹木伐取候輩有之哉ニ相聞得、甚以不可然事候付、以来社山竹木伐取候儀、屹と令禁止候条、向々江不洩様可申渡候、

明治三年午十二月廿日

知政所

九七五 相州劍崎ニ燈明台ヲ建設シ、来正月十一

日ヨリ点火ヲ令ス

十二月廿日

相州劍崎ニ燈明台ヲ建設シ、来正月十一日ヨリ点火ヲ令ス、

[第九百四十六]十二月二十日(達) (太政官) 府藩県

今般相州劍崎へ燈明台建築、来未正月十一日ヨリ点火候条相達候事、

布告

一此度相州劍崎ニ於テ、石造燈明台ヲ設ケ、千八百七十一年第三月一日 我明治四年正月十一日ヨリ、毎夜日没ヨリ日出迄、第二等閃光ノ燈明ヲ点ス、其高サ海面ヨリ百十

フート、礎ヨリ燈籠ノ中心迄二十五フートニシテ、東北二十七度ヨリ西南七十五度迄二百二十八度ノ

間、海方ヲ向ヒテ十秒毎ニ閃光ヲ發シ、達スルコト航海家里数十六マイル半ヲ隔テ、船ノ甲板上ヨリ見

ユ、又東北二十七度ヨリ同四十三度迄ノ間、赤光ヲ

挾ミプリマウス岩ヲ標セシム、右方位相違ナシ、

一此地ハ北緯三十五度八分ニシテ、グリーニツチヨリ

東経百三十九度四十二分ニ當ル、

右民部省ノ命令ニ依テ、航客へ布告スル者ナリ、

千八百七十一年第二月三日

横濱辨天燈明台局

日本政府器械方

(R. Henry, Branton)

アール・ヘンリー・ブランドン

九七八 各藩常備兵編制定則ヲ頒ツ

十二月廿二日

各藩常備兵編制定則ヲ頒ツ、

〔第九百五十七〕十二月二十二日(布)(太政官)

〔頭註〕四年兵部省第七十三ヲ以テ改ム
各藩常備兵ノ儀ハ、總テ大隊ヲ以テ編制可致、大隊未

滿ノ藩ハ、中隊・小隊ヲ以テ可編制事、

但步兵三中隊以上ノ藩ハ、大隊長並副官ヲ置キ不苦

事、

兵隊官員上等士官ノ儀、尔来左之通、

大隊長

右

少佐ト改称ス、

右撰拳之法追テ御規則被相定候得共、從來ノ分並当分之内於其藩撰拳、藩庁ヨリ伺出 奏聞ノ上被 仰付候

事、

中隊長

右

大尉ト改称ス、

副官

九七六 在官及非役有位ノ輩署名式ヲ定ム

十二月廿二日

從來在官者ノ某氏・某官ト書スルヲ停メ、尔今官職氏名ヲ書セシム、

〔第九百五十一〕十二月二十二日(布)(太政官)

〔頭註〕第九百七十八參看、十七年十一月廿五日内閣書記官選擇ヲ以テ、官爵在官之輩名称之儀、是迄苗字官相署シ来候処、自今官・姓名ヲ書スヘキモノトス

苗字・実名相署シ可申事、

但非役有位ノ輩、同様位・苗字・実名相署シ可申事、

九七七 大蔵省ニ令シテ新ニ度量衡ヲ製セシム

十二月廿二日

大蔵省ニ令シテ、新ニ度量衡ヲ製セシム、

〔第九百五十六〕十二月二十二日(沙) 大蔵省

度量衡新製被 仰付候ニ付テハ、万端工部省打合可取

計事、

小隊長

右

中尉ト改称ス、

半隊長

右

少尉ト改称ス、

以上上等士官

右撰挙ノ御規則ハ、追テ被相定候得共、当分従来ノ通、

藩庁ニテ撰挙致シ可届出事、

曹長

権曹長

軍曹

以上下等士官

伍長

右四職ハ少佐ニテ撰挙、藩庁ヘ可届出事、

但下等士官進退黜陟ノ儀ハ、藩庁取束置、毎年二月、

八月兵部省ヘ可届出事、

一砲兵ノ儀ハ、一隊六門ヲ以テ編制可致、最モ歩兵二

大隊ニ付、一砲隊相備可申事、

但歩兵二大隊以下ハ、砲兵ノ備否便宜ニ可任事、

隊長

右

大尉ト改称ス、

副官

分隊長

右

中・少尉ト改称ス、

以上上等士官

右撰挙之御規則ハ、追テ被相定候得共、当分従来

之通、藩庁ニテ撰挙致シ可届出事、

曹長

権曹長

軍曹

以上下等士官

伍長

右四職ハ少佐ヨリ撰挙、藩庁ヘ可届出事、

一万石以上之藩々ニテ、常備歩兵・砲兵トモ編隊致シ、

石高端分有之向ハ、予備兵ヲ制候欵、或ハ兵員ヲ廢

シ候トモ可任便宜、最モ其旨兵部省ヘ可届置事、

一月給之儀ハ、先ツ藩々之適宜ニ可任事、

一軍服之儀ハ、製法並紐釦及ヒ帽前面之徽章共、別紙御定之通可相用事、

一帽子・軍服地織質之儀ハ可為別紙之通、最モ俄ニ改製ニ不及、尔後新製之分、漸ヲ以テ改メ可申事、

但士官・兵卒服地合区別有之候得共、即今之処、可任適宜事、

右之通ニ候条、此旨相達候事、

(別紙服制)ハ略ス、

九七九 海外留学生官私ノ規則ヲ定メ大学ニ隸ス

十二月廿二日

海外留学生官私ノ規則ヲ定メ、並ニ之ヲ大学ニ隸セシム、

〔第九百五十八〕十二月二十二日(布)(太政官)

〔頭註〕五年太政官第二百十四号ヲ以テ改ム

海外留学規則

一海外留学生徒ハ、都テ大学管轄ノ事、

但大学ヨリ留学免状、並外務省ヨリ渡航免状可相渡事、

一留学中諸般ノ事務ハ、都テ弁務使ヘ依頼シ、其指令ニ従フヘシ、且生徒ノ中人撰ノ上、生徒總代ノ者一人或

ハ幾人弁務使ヨリ可申付事、

一留学生ハ尊卑ノ別ナク、皇族ヨリ庶人ニ至ル迄、都テ被差許候事、

一留学ニ官撰ト私願トノ別アリ、因テ其規則ヲ分ツテ、之ヲ揭示スル如左、

官撰留学規則

一華族ハ太政官ニテ撰挙、大学生徒ハ大学ニテ撰挙、士庶人ハ其府藩県ノ庁ニテ相撰、其姓名ヲ弁官ヘ差出許可ヲ可受事、

但藩庁ノ選ニヨリテ可差遣生徒ハ、大藩三人、中藩二人、小藩一人ト其員ヲ定ム、尤小藩ハ暫ク其便宜ニ従フヘシ、且藩々ノ都合ニヨリ申立次第、定員外ヲモ可被差許事、

一士庶人ノ内、府藩県学校並私塾等ニ在テ、学力拔群ノ者ハ、直ニ大学ヨリ撰挙候儀モ可有之候事、

一選挙心得ノ事、
生徒ヲ選挙スルニハ、左ノ三件ヲ精細ニ検査シテ、其人ヲ注擬スヘシ、

第一、稟性誠実敏達ノ者ヲ選フヘシ、
第二、年齢十六以上二十五歳迄ニ限リ選フヘシ、

但非凡俊秀ノ者ハ、此限ニアラス、

第三、和漢ノ古典史乘等ニ略涉リ、且洋学モ一通

リ研究、第一其在留国語学ニ達スル者ヲ選フヘシ、

但非凡俊秀ノ者ハ、洋文不解トイヘトモ、時宜

ニヨリテ之ヲ選フヘシ、

一留学学科ノ事、

学科ハ其人材ニ依テ、可命事モアリトイヘトモ、通常

当人ノ望ミニ任セ可差許事、

但普通学科成業ニ至ラントスル前、其志ス所ノ専門

学科ヲ弁務使ヘ可申立事、

一年限並学費ノ事、

留学年限ハ、通常五年ト相定候事、

学費ハ、通常一ケ年□元ト定メ、留学中一切ノ諸費、

此内ニテ弁スヘシ、尤往返旅費ハ別ニ可給候事、

但上程前為支度料□可賜事、

右学費ハ、毎年九月中、大学ニテ其管轄ヨリ受取、其

十月コレヲ弁務使ノ許ヘ可差送事、

一上程並帰朝ノ事、

生徒上程前、其地方ノ氏神ヘ参拜シ、国恩報効ヲ祈念

シ、神酒ヲ拜戴シテ、国体ヲ辱メサルノ誓願ヲ可立、

帰朝ノ時亦告賽スヘキ事、

但東京ヨリ上程ノ者ハ、神祇官ヘ出頭、 神殿ヘ参

拜スヘキ事、

一留学中心得ノ事、

留学中第一言行ヲ慎ミ、学業ヲ勉ムルコトヲ專一トシ

テ、決シテ国体ヲ汚候様ノ所業有之間敷、万一流学中

懶惰或ハ不行跡ノ聞ヘ有之者ハ、直ニ之ヲ呼戻シ、相

当ノ咎メ可申付事、

留学中拝借金ハ勿論、外国人等ヨリ借財イタシ候儀、

一切不相成候事、

私願留学規則

一私願ノ者、華族ハ直ニ太政官、士庶人ハ府藩県ヘ願立

候得ハ、其所ニテ一応其稟性・身体・年令並学業ノ浅

深等吟味ノ上、差許スヘシ、検査甚タ厳ナルヲ要セス、

且洋文不解者トイヘトモ許可スヘシ、尤其管轄庁ヨリ、

直ニ大学ヘ達スヘシ、留学中ハ大学ノ管轄トナスヲ以

テ、官選同様留学免状可相渡、且外務省ヨリモ渡航免

状可相渡候事、

一年限ハ、通常当人ノ願ニ任セ候事、

一学費旅費等、私弁勿論ノ事、

但一ヶ年大凡六七百元以上ヲ費スニアラサレハ、留

学為シ難キヲ以テ、右丈ノ費ヲ弁スルコト能ハサ

ル者ハ許サス、且右入費ハ、官選同様大学ニテ受

取、弁務使ノ許ヘ可差送事、

一上程・帰朝等ノ規則官選同様ノ事、

一留学中心得亦官選同様ノ事、

一諸官員ノ内ニテ、渡航諸学科研究可命者ハ、年数ノ多

少ニ不拘、質問ノ名義ニシテ、別ニ規制アルヘシ、

一其外海陸軍生徒並一時遊歴、商法等ニテ罷越候者モ、

別ニ規制アルヘシ、

右之通ニ候条、此旨相達候事、

【参照】十二月二十二日

各通

外務省
大学

海外留学規則、別冊ノ通御布令相成候間、為心得相達候事、

九八〇 在官並有位ノ輩署名式、平日往復文書等

ハ略式ヲ用イシム

十二月廿三日

在官並有位ノ輩署名式、平日往復文書等ニハ、略式ヲ用
キシム、

【第九百七十八】十二月二十三日（布）（太政官）

在官並有位ノ輩名称ノ儀、自今官位・苗字・実名相用

候様、御達ニ相成候得共、平日往復文書等ハ、略式相

用不苦候事、

但同苗字・同官位ノ者有之候得ハ、実名相加ヘ区别
可致事、

九八一 民部大丞吉井友實・兵部権少丞澤宣種ニ、

徴兵三中隊ヲ付シテ中野県ニ赴カシム

十二月廿四日

曩ニ松代藩ノ騷擾スルヤ、中野県下ノ暴民モ亦之ニ応シ、

群起シテ県庁ヲ焚ク、翌日兵部権少丞澤宣種嘉嘉子ヲシテ、

徴兵ヲ率中、民部大丞吉井友實輔等ヲシテ、之ニ赴カシ

ム、

九八一ノ一
吉井三峰日記
友實

同月廿四日

信州ニ一揆起リ、中野ヘ出張ノ命ヲ蒙ル、福原権少丞・

竹田庶務少祐・關口大令史等同様命セラル、

同月廿六日

十二字出發、板橋宿ニテ休憩シ、藏宿ニ宿ス、佐賀藩ノ徵兵一大隊發向ス、

同月廿七日

八字出立、天神橋ニテ午餐シ、二字過桶川ニ到着、止宿ス、

同月廿八日

八字桶川出發、同所ヨリ一里計ノ処ニ、浦和・忍ノ境標アリ、浦和県ノ管轄ハ大約十里計ナリ、管下窮民多シ、今夜熊谷宿ニ宿ス、

除夜、

岩鼻ニ宿ス、

明治四辛未年正月元日

上州高崎ニ泊ス、

同月八日

松代ニ着ス、事既ニ鎮定シ居タリ、

同月廿一日

本日迄松代ニ滞在ス、

同月廿二日

松代ヲ發シ、地藏峠ヲ越へ小諸ニ出テ、廿六日帰京ス、

九八ノ二

十二月廿三日

御沙汰書

庶務正北代正臣

信州路土民動揺ニ付、為取締被差遣候条、臨機ノ取計可致、猶林権大丞可申合事、

民部権大丞林友幸

信州路土民動揺ニ付、為取締北代庶務正被差遣、猶其方申合可取計旨、御沙汰相成候条為心得相達候事、

九八ノ三

十二月廿四日

御沙汰書写

兵部権少丞澤宣種

中野県出張被 仰付候事、

兵部省

徵兵三中隊、中野県出張被 仰付候事、

名古屋藩

松代藩

大垣藩
 高田藩
 松本藩
 上田藩
 高島藩
 高遠藩
 岩村藩
 飯山藩
 小諸藩
 飯田藩
 龍岡藩
 苗木藩
 清崎藩
 椎谷藩
 須坂藩
 岩村田藩
 高富藩

被 仰付候間、時宜ニヨリ、出張先キニ於テ、其藩々
 出兵申達候儀モ可有之候条、此旨相心得、嚴重手配リ
 候様 御沙汰候事、

九八一ノ四

民部大丞吉井徳春
 民部権少丞福原友孝

御用有之、中野県へ出張被 仰付候事、

鹿兒島県士族

吉井藤原友實

幸輔
 徳春

中略

同年明治三年十二月廿四日

一御用有之、中野県へ出張被 仰付候事、
 以下略ス

今般中野県下小民沸騰、県庁ニ迫リ、加之各所不穩ノ
 趣、自然其機ニ乗シ、不逞ノ徒動揺暴行候哉モ難計ニ
 付、為鎮撫兵部官員兵隊引卒出張、臨機ノ処置可致旨

九八二 私ニ寺院ヲ処分スルヲ禁ス
 十二月廿四日

地方官ニ令シテ、私ニ寺院ヲ処分スルヲ禁ス、

第九百八十二 十二月廿四日(布) (太政官)

今般寺院寮被置、追々御改正筋被 仰出候条、於各管

庁区々ノ処置致間敷事、
〔頭註〕四年太政官第三百七十五(依り消滅)
〔頭註〕五年太政官第四百四(參看)

但無祿無檀ノ寺院合併等、自今本寺法類寺檀共故障
有無詳細相糺シ、調へ書ヲ以テ可伺出事、

九八三 請人証書無キ者ノ雇役ヲ禁ス

十二月廿四日

諸官員ヲ始メ、宮・華族・士族・卒ニ至ルマテ、請人証
書無キ者ヲ雇役スルコト莫ラシム、

第九百八十三 十二月二十四日(布) (太政官)

〔頭註〕四年太政官第六百七十二(依り消滅)
諸官員ヲ始メ、宮・華族・士族・卒ニ至ル迄、召抱人
身元取糺候ハ勿論、請人証書無之召抱候儀、不相成候
事、

但厄介人指置候節モ、同様可相心得候、尤当今召抱
並厄介共、人数・姓名書記管轄所へ可届出候事、

九八四 庶人ノ双刀ヲ佩スルヲ申禁ス

十二月廿四日

庶人ノ双刀ヲ佩スルヲ申禁ス、

第九百八十四 十二月二十四日(布) (太政官)

〔頭註〕九年第三十八号布告ニヨリ消滅
農工商之輩、許可無之、猥ニ帶刀致シ候者有之趣、以
之外之事ニ候条、地方官ニ於テ屹度取締可致候事、

九八五 文武諸技芸師家ノ私塾ヲ開ク者ハ、地方

官許可ヲ受ケシム

十二月廿四日

文武芸術ヲ以テ、家塾ヲ開クモノヲシテ、其地方官ノ許
可ヲ受ケシム

第九百八十八 十二月二十四日(布) (太政官) 府藩県

〔頭註〕四年太政官第六百四十四(依り消滅)
諸技芸師家私塾之儀ニ付、別紙兩通之通り御達相成候
条、其旨相心得、今後管轄中之者共、各地方師家へ入
塾之節ハ、其為人ヲ糺シ添書可差遣候事(別紙ハ第九百
八十六・第九百八十七ニ同シ)

【参照一】

第九百八十六 十二月二十四日(布) (太政官)

〔頭註〕四年太政官第六百四十四ヲ以テ改正
諸技芸師家私塾相開候向キ生徒入塾之節、身元取糺シ、

地方官添書無之者、入塾差許候儀不相成候事、

但塾生増減明細書記シ、月末地方官へ可届出候事、

【参照】

第九百八十七「十二月二十四日(布) (太政官)

(頭註)「五年文部省第六号参看」

諸技芸師家私塾相開候者、其地方官之許可ヲ可受候事、

九八六 三府及ヒ開港場警備規則ヲ頒チ藩県モ之

ニ準拠セシム

十二月廿四日

三府及ヒ開港場警備規則ヲ頒チ、藩県モ亦之ニ準拠セシ

ム、

第九百九十一「十二月二十四日(布) (太政官) 藩県へ

(頭註)「六年司法省第十九号参看」

三府並開港場取締心得、別紙之通御達相成候ニ付テハ、

藩県ニ於テモ右ニ準シ、管内相応之取締可致候事 (別

紙ハ第九百八十九ニ同シ)

別紙

第九百八十九「十二月二十四日(布) (太政官)

(頭註)「七年太政官第十四号達・同第六十八号達・八年同第二十九号達参看」

三府並開港場取締心得

一 地方警備之儀ハ、諸民安堵營業致シ候様トノ御旨趣ニ

候間、深ク御趣意ヲ奉体シ、無怠情嚴重取締可致候事、

一 持場中其地方之規則ニ從ヒ、昼夜無間断見廻リ、火附・

盜賊・貨幣贗造等之類ハ勿論、強談・暴行總テ諸民ノ

妨害トナルヘキ所業ニ及ヒ候者ハ、見聞次第速ニ召捕

ヘ、其地方官庁へ可届出候事、

一 胡乱ノ者召捕ヘ候節ハ、一応聞糺シ、疑シキ者ハ速ニ

其地方官庁へ可届出候事、

一 逮捕ノ節手余リ候者有之節ハ、其場合相応ノ手配ヲ以

テ取押ヘ可申候事、

一 街上拔刀スル等、狂悖ノ所業ニ及ヒ候者有之節ハ、直

ニ逮捕可致ハ勿論、若逃去候ハ、迅速前後左右ノ各

区へ相通シ、其地方官庁へモ相届、無抜目手配リ可致

候事、

但近傍大小ノ各区響応ノ方法、平素打合せ置、緩急

互ニ相援可申事、

一 乱妨人等召捕候節ハ、其次第二ヨリ御褒美可被下、万

一手疵ヲ負ヒ、或ハ死亡ニモ立至リ候ハ、療養・埋

葬・家族扶助料等可被下候事、

但時宜ニヨリ其所ニ於テ、他ヨリ力ヲ扶ケ候者有之

節ハ、本文同様ノ事、

- 一 持場中無籍ノ者有之候テハ、取締ノ妨碍ニ相成候間、平常心掛、見聞次第其地方官庁へ可届出候事、
- 一 棄子又ハ途中ニ於テ不慮ノ怪我人・急病人並行倒レ、溺死人等有之節ハ、見附次第懇ニ手当致置、速ニ其地方官庁へ可届出候事、
- 一 出火ノ節ハ第一盜賊ヲ見糺シ、燒家荷運ヒノ障害ヲ除キ、路傍ノ人ヲ払ヒ、消防便利相成候様差配可致候事、
- 一 夜五ツ時後、無提灯ニテ通行ノ者ハ取糺シ、怪敷体有之候ハ、差止置、其地方官庁へ可届出候事、
- 一 落シ物見附候ハ、拾取、速ニ其地方官庁へ可届出候事、
- 一 路傍並川筋へ塵芥穢物等取捨候ヲ糺シ、其他總テ路街ノ障碍ト可相成儀ハ、其地方官庁へ可申出候事、
- 一 外国人通行ノ節、自然不都合ノ儀有之候テハ、御威信ニモ関係候儀ニ付、持場中無手拔取締可致候事、
- 一 持場中ニ於テ、馬車ヲ馳セ、馬ヲ飛セ、路人ヲ傷害候者有之節ハ、人馬共取押へ、其地方官庁へ可届出候事、
- 一 角力・芝居其外群集ノ場所ハ、不取締ノ儀無之様、別テ心ヲ用ヒ可申事、
- 一 徒党強訴ノ企、又ハ囚捕ヲ脱シ候者、潜匿等ノ儀聞込候ハ、探索ノ上其地方官庁へ可届出候事、

一 地方警備ノ総長ハ勿論、其各区ノ伍長ハ、時々巡邏シテ勤惰ヲ監督シ、褒貶可致候、且附屬ニ至ル迄賄賂ヲ受ケ、或ハ尋常ノ訴訟等ニ関係ノ儀、一切嚴禁ノ事、右之条々堅相守可申候、尤取締場所・人員並時刻割等之儀ハ、其地方之便宜ヲ以テ、精密規則可相立候事、

(添書)

三府並開港場取締心得、別紙之通り御定相成候条、此旨相達候事、

九八七 岩下方平ニ官祿ノ三分ノ一ヲ終身下賜シ

東京府貫屬ヲ命ス

十二月廿四日

朝廷ニ於テハ、岩下方平左次右衛門ニ官祿六百石ノ三分ノ一ヲ終身下賜セラレ、東京府貫屬ヲ命セラル、

鹿兒島県士族

岩下方平

左次右衛門
左二

中略

同年明治三年十二月廿四日

一在勤中職務勉勵候ニ付、官祿六百石ノ三分ノ一終身下

賜、東京府貫屬被仰付候事、

以下略ス

午十二月十九日

民事局

右之通被仰付候条、地頭江申渡、可承向江も可申渡候、

明治三年午十二月廿五日

知政所

九八八 三俣郷内飛地村落ヲ山之口郷ニ併合ス

十二月廿五日

三俣郷内飛地村落ヲ、山之口郷ニ併合セシム、

一下三俣蓼池村後目方限之内、別紙魚絵図面通遙懸隔、

山之口富吉村之内江飛散居、諸事煩敷候付、此節大御

支配ニ付、御檢地掛・民事奉行・両郷地頭并副役、其

外両郷役々立会、篤と見分之上及評議候処、山之口被

召付候ハ、郷境も分明相成可然相見得、於双方聊申

分も無之段承届候付、此節山之口江被召付趣申越、猶

又致吟味候処、右之通郷不明(替カ)□、飛地ニて被召置、何篇煩

敷不弁利之儀も可有御座候付、山之口江被召付候方、

往年之煩も無之可然候間、御檢地掛・民事奉行吟味通

被仰付度、此段申出候、以上、

但百姓家部之儀、都て居成ニて被召置、士族丈は

本郷江引戻度段も承届候、

九八九 御記録編輯ニ付華族現存者ノ履歴ヲ録上

セシム

十二月廿六日

御記録編輯ニ付、華族現存者ヲシテ、其履歴ヲ録上セシ

ム、

〔第九十八〕十二月二十六日（弁官）

御記録編輯御用ニ付、華族ノ面々現存ノ者、履歴事実

左ノ通分部記載可被差出候也、

但兼テ御達相成居候書類外ニ有之事、

一元服・家督・任官・叙任並奉職ノ始末、又ハ別段御

用向相勤候次第、

一建白並緊要ノ願伺届等、大意御附紙共、

一文武技芸或ハ著述等、

以上

九九〇 諸藩ノ製造札二通ヲ大蔵省ニ進致セシム

十二月廿七日

諸藩ヲシテ、製造札二通ヲ大蔵省ニ進致セシム、

〔第十三十二〕十二月二十七日(太政官)

諸藩ニ於テ、從來製造之札ニタ通ツ、來正月中大蔵省へ可差出候事、

九九一 藩庁西郷隆盛ニ勅使ニ附随シ出府ヲ命ス

十二月廿八日

藩庁ニテハ、西郷隆盛ヲシテ、勅使ニ附随シテ出府ヲ命ス、

一 西郷吉之助

右は御用有之、勅使江被召附、急ニテ出府被 仰付候
条、向々江可申渡候、

明治三年午十二月廿八日 知政所

九九二 藩庁式内・式外ノ神社十八社及五社ニ、奉

幣使ノ次第並年頭祝賀ノ順序ヲ令ス

十二月廿九日

藩庁、正月ニ於ケル式内・式外ノ神社十八社及五社ニ、奉幣使ノ次第並年頭祝賀ノ順序ヲ令ス、

一 正月朔日

一式内・式外之神社十八社並五社、花尾神社・郡山一之宮神社江、献幣使御初穂五十疋御進献等、出納奉行請持、

一二丸御庭内諸社江、献幣使家令御初穂拾疋ツ、御進納等、前条同断、

一 幣帛料錢五十疋ツ、

右福ケ迫諏訪社

鶴嶺神社 照國神社江

献幣使家令御進納、調方出納奉行請持、

但

四日ヨリ平服

一 朔日ヨリ三日迄、十五日御門開、

右外別冊御次第之通、

以上

二 丸

御病氣ニ付、年頭御規式御手当、

正月朔日

勅祭神社

一霧島神社

国府

一鹿兒島神社

一枚聞神社

一益救神社

一宮浦神社

一加紫久利神社

一韓國宇豆峯神社

一大穴持神社

右式内

一智賀尾神社

鶴田

一紫尾神社

一霧島神社

一鹿兒島神社

一田布施神社

一伊邇色神社

一白鬚雷神社

一志奈尾神社

一櫻島神社

右式外官知〔狂之〕

右現神社江は、神主代又は地頭等より御代參献幣、

一五社江

從三位様献幣使家令、

一二丸諸神社江献幣使同断、

一花尾神社

郡山

一一之宮神社

右献幣使

但

從四位様献幣使兼、

二日

島津珍彦殿一列

同部屋栖方

右於二丸家令江相付、御祝儀被申上候、

一等官

二等官

右於二丸家令江相付、同断、

三等官以下
八等官以上
右於御本丸竹之間伝事江相付、同断、

鹿兒島士族

右於御本丸伝事江相付、右同断、

三日

一福ヶ追諏訪並鶴ヶ嶺神社・照國神社江献幣使家令、

琉球人

右御本丸於席々大参事・権大参事江相付、御祝儀申

上候、

諸郷士族

隊長以上

一郷一人ツ、

附 士

附 属 長

右同断、御本丸於鷺之間、御帳ニ相付退出、

但

隊長無之郷々は、旧噺・組頭之内より同断、

以上

九九三 忠義公所勞ニ付正月遙拜式ニハ出座ナク
諸神社へ献幣使ヲ遣ス

十二月廿九日

忠義公所勞ニ付、来年正月朔日ノ遙拜式ニハ出座ナシ、
仍テ諸神社へハ献幣使ヲ遣ハサル、

一來正月朔日御規式之儀、

從四位様御所勞付、

天朝并

神祇御遙拜は、御行形ニテ被為遂、諸神社江は献幣被

仰付候旨、被

仰達候条、向々江可申渡候、

但御遙拜席等は、御出座之節通相設候様被

仰付候、

明治三年午十二月廿九日

知政所

九九四 藩庁民事局城下士へ植杉料金ノ賦課並納

期ヲ達ス

是月(十二月)

藩庁民事局、植杉料金トシテ一般ニ之ヲ賦課セシメ、仍テ其納期ヲ達ス、

一 御城下士族、每春人別差杉差入、代銭一家部ニ付三拾式文ツ、出銭ニテ、近在之内江差入方被仰付候付、右出銭、以来壹分銀同様御達より取揃方被仰付置、且高百石より百九拾九石迄三拾式文重、式百石より式百九拾九石迄六拾四文ツ、右之割を以、百石ニ付三拾式文ツ、重ニテ、出銭被仰付事候付、六方限無親疎右通致取揃方、来月十日限当局江相納候様可被取計候、此段申達候、以上、

明治三年午十二月

民事局

御達中

九九五 藩庁下檢地ノ心得ヲ達ス

是月(十二月)

藩庁下檢地ノ心得ヲ達ス、

一來ル七日より、嶋津又八郎屋敷初より下方順々改可致候間、先達て相達置候通可被相心得候、
一 今般新ニ切坪等ニテ屋敷讓受候者は、門明又は境立等

分明有之候様可致置候、

一 屋敷壹反より少々過上ニテ、現地面は畦廻り相成、又は壹反以上ニテ、四方高岸等ニテ余地難讓渡候付、御法様次第被仰付度申出置候類之屋敷は、改当日見分可致候間、其心得ニテ可罷居候、

一 壹反以上ニテ、居家相掛余地御限月中余人江難讓渡、拾ヶ年延願之屋敷も、右同様見分之上可令免許候、
一 近在五ヶ所借地之儀、現屋敷成願之者は、右同様一緒ニ改可致候間、其心得ニテ可罷居候、
右之通可申渡候、

明治三年午十二月

民事局

九九六 藩庁紙札引換期限延長ヲ令ス

是月(十二月)

藩庁紙札引換期限延長ヲ令ス、

一 錢拾貫札

但唐船之模様

一 銀百目札

一 銀五拾目札

但書同断

但書同断

右は紙札御改正ニ付、引替日限当十一月中被仰渡置候
処、遠郷又は端々等ニは、引替後れ候も有之哉ニ相聞
得候間、来ル廿日限日延被仰付候様、於其儀は其段向
々江可被仰渡哉と吟味仕候、以上、

明治三年十二月

會計局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

十二月

知政所

九九七 紙札真贋鑒別ノ為鑒定人ヲ新シク置ク

是月(十二月)

紙札真贋鑒別ノ為メ、鑒定人新置ノコトヲ令ス、
一御藩内札之儀、過分之偽札相見得、諸郷々ニおるては、
愚昧之百姓共等真偽難見分候処より、別て及迷惑、不
便之至候付、兩人ツ、国鈔方掛被仰付、每郷見本札被
渡置、村長ニも真偽相分居、百姓等江も巨細示教いた
し、不正之札見出候節は、出所巨細ニ相糺、届申出候
様被仰渡、人柄之儀ハ地頭より取調申出候様、左候て
国鈔掛・生産奉行之内より、春秋諸郷廻勤被仰付、真
偽委細申聞せ置、見本等相渡、取締向達置候様被仰付

度、太政官金札之儀も偽札有之候間、是以御当地江は
見究人も被仰付置候間、諸郷町人等之内慥成者差出、
為見習置候様、諸郷々地頭副役江不洩様被仰渡度致吟
味候、此段申出候、以上、

明治三年十二月

會計局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

十二月

知政所

九九八 藩庁国書講義日ヲ定メ五等以上ニ聽聞ヲ

許ス

是月(十二月)

国書講義日ヲ定メ、五等以上ニ其聽聞ヲ許ス、
一 国書講義

毎月三日

右之通御式日被召建、於御座之間被遊 御聞候、国学
掛、学頭並助より可相勤候、左候て刻限等之儀は、漢
書講義同様五等官以上話聞被仰付候条、向々江可申渡
候、

明治三年十二月

知政所

九九九 火薬運搬ノ通行路ヲ指定シ之ヲ戒飭ス

是月(十二月)

火薬運搬ノ通行路ヲ指定シ、更ニ之ヲ戒飭セシム、

坂元村奥之原

一火薬庫

但火薬局より稲荷馬場筋、韃韃冬々、旧鍋屋跡前通、

火薬庫迄往来、

草牟田

一火薬庫

但火薬局より稲荷馬場、さよみ坂、伊藤彦介角より

上之馬場筋、堅馬場北郷権五郎角より大橋筋、嶋

津美嘉佐角より新橋、御城下榭形より照國社下、

山下橋より大手口番所、上之平通、新神橋涯甲突

川水流火薬庫迄往来、

犬迫村

一火薬庫

但火薬局より新上橋涯甲突川水流迄、前条同断、玉

江橋川水流相良笑之丞前通り、石井手より火薬庫

迄往来、

西別府村

一火薬庫

但火薬局より榭形迄前条同断、千石馬場、西田橋、

伊地知壯之丞前通、武町通、天神瀬戸入口より火

薬庫迄往来、

右之通火薬局より諸所火薬庫江火薬運輸通路、尔後右

之通被相定、銘々赤色之荷標相付致運送候付、其通路

筋猶以火用心可入念、尤在村之儀は、作職培養のため

塵焼等可致事候間、右運輸之節は、前々日又は前日火

薬局より在番検者方江可致問合候、左候て村長江猶又

火用心嚴重可致取締候、此旨民事局並掛兵器奉行へ申

渡、可承向々江不洩様可申渡候、

明治三年午十二月

知政所

一〇〇〇 伊久ヲ島津第七代ニ加ヘル

是月(十二月)

伊久公ヲ第七代ニ加ヘテ、七代元久公ノ上六代氏久公ノ

下ニ置クヘキヲ達ス、

一御六代師久公御嫡子

伊久公

右は從御父師久公、御讓被為受置候薩州守護職、並御代々御相伝之御重器等、

元久公江御讓与被為 在、御家御相統之明証有之候得共、総州家断絶後、

御祭祀令被為絶、御代数ニも不被為加候付、元久公御同様、御七代之御世代ニ被為加、御順は

氏久公 師久公 伊久公 元久公と、今般被定置候旨被 仰達候条、向々江不洩様致通達、諸郷並琉球・嶋々江可申渡候、

明治三年午十二月

知政所

【参照】

〔西藩野史〕

先是 師久公薨シテ後、世子上総介伊久初大夫判官ト称ス、貞和三年二月朔日生テ久哲ト称ス、薩州数郡ヲ領ス、躬薩州河邊郡ニ居シ、長子太夫判官後稱守久ハ木牟禮城出水、次子山城守忠朝ハ碓山城佐平ニ居ラシム、守久性凶暴ニシテ父ニ逆フ、師ヲ帥ヒテ父ヲ攻ルニ至ル、元久公人ヲツカワシテ説シメテ曰、父子相暴ハ逆ノ大ナルモノナリ、天神以テ怒ル、其責メ免ルベカラス、守久悔悟シ、父子和睦シテ

帰ル、伊久是ヲ徳トシ、己ガ蔵ル処ノ忠久公ノ甲冑数百年ニ至テ、其形損スル処アリ、享保中繼豊公、小十文字ノ太刀 伝云、源家ニ命シテ、更ニ似セ作ラシム、并蔵テ宝トス

忠久公ノ大弟ヲ以テ、元久家タルヲ以テコレヲ伝フ、今ニ至テ相伝ラテ家珍トス

公ニ献セントス、公辞スルニ守久アルヲ以テス、伊久曰、守久ガ不肖ナル、他日ノ存亡イマタシルベカラス、不幸ニシテ他人ノ有トナラバ、百世ノ遺憾ナルベシ、於是 公山田右京亮一族ト云、伊地知民部少輔阿蘇

ヨ河邊ニツカワシテ、コレヲ受ケシム、伊久モ亦阿蘇谷周防介一族ト云ヲ以テス、阿蘇谷氏、其先忠時公ノ六男大炊助久時ニ出ツ、公ノ讓ヲ受テ伊賀国長田庄ヲ領ス、子孫薩州羽月ニ居ス、

石塚大和守ト称ス、家臣ヲ以テス、ヲシテ授ク、相議シテ曰、重器ノ授受民屋ハ褻嫚也、仏寺ハ凶場ナリト、田中松尾内ニ授受シテ帰ル、

テ帰ル、

〔島津氏正統系図〕

略○上

○師久

幼字生駒丸 上総三郎左衛門尉 大夫判官

從五位下 上総介 称ニ総州家

○正中二年乙丑八月十六日誕生、母同ニ宗久

大友因幡守親時入道徳々女也

○道鑑嫡子宗久早世故、分ニ讓薩隅而国守護職及領国諸々莊園於師久・氏久兄弟、兄弟並立、兩

家相救而欲令子孫繁栄国家安全也、師久者被補薩摩国守護職、而居住薩摩郡碓山城。自貞和至永和三十余年、属將軍方、軍忠許多也。

。永和二年丙辰三月二十一日逝、享年五十二、法号定山道貞称名寺殿

○氏久

又三郎 三郎左衛門尉 修理亮 越後守

陸奥守 称奥州家

。嘉曆三年戊辰誕生、母同前

。被補大隅国守護職、在城薩州鹿兒島、後

移隅州大始良、又移日州志布志

。觀應二年九月二十八日、筑前金隈合戰時、

氏久將薩隅日三州軍兵、馳加將軍方一色

右馬頭範光之軍、力戰數回、蒙疵、尊氏卿

賜感贖、其後暫不安身、兄師久相共攻

城、戰野粉骨碎心、年々退治逆徒、漸

至永和二年、薩隅日三州歸泰平者也

。嘉慶元年丁卯閏五月四日逝、享年六十、法

名玄久、号齡岳即心院殿

光久

四郎左衛門尉 法名壽山為公

。子孫無之

。延文年間属征西將軍宮、屢拔軍忠

氏忠

乙壽丸 但馬守 子孫記于別紙

女子

祖鑑房

女子

京子

女子

彌々

親忠

初忠親 愛壽丸 宗四郎 左衛門少尉

下野守

。自建武至応安属將軍方、勞自他国

所々之軍務、其功不少

。六月二日死去、法名道壹、号南天

久氏

龜壽丸 彦二郎 三郎左衛門尉

。將軍尊氏卿近習幸臣也

。貞和三年尊氏卿使諸將遣攝津一伐、楠正

行、久氏從之

九月九日將進發、謁東寺、見尊氏、公

詠歌 自書_レ扇繪、以賜焉、其歌

九つの国より御代ハ治りて

めてたき事を白菊の花

久氏珍戴而賜之本国之舎兄下野守忠親、而後同月十一日於天王寺遂戰死也

忠武

松壽丸 若狹守 法号道滿大聖

神代家

。領_ニ知于信濃国大田莊之下

女子

伊久

大夫判官 上総介 九花齋

。貞和三年丁亥二月一日誕生

。嫡子守久不幸無道、而非可相統家器

故、以代々家督相伝之重器讓從弟陸奥守

元久、自_レ尔後奥州家日盛月昌、総州家日衰

月微也、

。應永十四年丁亥四月六日卒、年六十一、法

号久哲道観

久安

号碓山 三郎左衛門尉 始良祖也

守久

生若丸 大夫判官 播磨守 入道名得佛

。應永二十九年、太守久豊使嫡男又三郎貴久

攻守久之居城山門院者、甚急也、守久失

防禦術、出奔肥州、不經幾年而卒、法号

義山道仁

忠朝

初忠明 山城守 入道名道世 相馬祖也

久照

生黒丸 又三郎 称北殿 法名道音

○元久

○以下略ス

一〇〇一 来十五日島津忠義御書院ニ出座、初謁

見ノコトヲ達ス

是月(十二月)

来十五日、忠義公御書院ニ出座アリ、初謁見ノコトヲ達セラル、

一來十五日四ツ時、御書院江

御出座、初て之 御目見并諸御礼被 仰付筈候間、向々江可申渡候、

明治三年午十二月

知政所

一〇〇二 福昌寺門前ヲ池上ト改称ス

是月(十二月)

福昌寺門前ヲ池上ト改称セラル、

旧福昌寺御門前之事

一池上

右之通、旧銘ニ依リ相唱候様被仰付候条、向々江可申渡候、

明治三年午十二月

知政所

一〇〇三 藩庁銃器擅使者ノ過失ノ罪律ヲ擬定シ

一般ニ戒飭ス

是月(十二月)

銃器擅使者ノ過失ノ罪律ヲ擬定シ、一般ヲシテ戒飭セシム、

一鉄砲は人命殺死の戎器、猥りに放発すへからざる、固り禁制向詳審御布告之趣も有之候得共、猶至今不逞之徒有之、殺死不少、別て粗暴放恣之至リニ付、予防之嚴法を設け、懲戒畏懼せしむる儀緊要ニ候間、向後御定外之場所ニ於て発銃するハ、空砲といへとも慎ニ二百日処し、傷くるハ其軽重ニ從ひ改律、鬪毆殺傷ニ二等を減し、慎壱ケ年以上を以科断し、死ニ至るハ嶋方蟄居式拾ケ年ニ被処、若隠蔵する者ハ各一等を加へ、流罪ハ止候様可被究置哉、左候て其趣御藩内一統江御布告有之度候、以上、

但本条通於御決定は、尚又嚴肅警察向行届候様可有之事ニ付、監察局江吟味被仰渡候、

明治三年午十二月

札明局

右之通被仰付候、就ては監察局嚴密取締被仰付置候間、若輩之面々禁令を堅く致遵守、聊違犯無之様、兼て父兄等より尽教戒、学館并郷校等江出席之面々^{本マ}は、師員より可致寧致示諭、諸郷江は地頭より同断

可相違旨、向々江不洩様早々可申渡候、

十二月

知政所

ス

是月(十二月)

朝廷ニ於テハ、已ニ海軍新設ニ付、藩庁ノ海軍方ハ之ヲ
廃止ス、

一海軍方

是月(十二月)

射の場内ニ入り、銃丸採掘スル者ヲ嚴禁ス、

一川尻調練場江從前輕輩之者共、玉搦等江狼ニ踏入、間

ニは十分之者も有之哉ニ相聞得、看々及過傷候も有之、

多くハ幼少等ニて、甚不愍之至候、右付今般新ニ狙撃

築造相成、往來之口々標木被建置候付、狙撃之節は、

向後平常迎も、右経界内江踏入候儀令嚴禁候、尤洲崎

其他射場内江踏入候儀も、同様申付候条、兼て支配頭・

主人又は父兄等より、聊心得違無之様、猶又厚く可致

警戒候、尔后犯禁於有之は、屹度御咎目可被仰付候、

此旨向々江不洩様可申渡候、

明治三年午十二月

知政所

是月(十二月)

藩庁新金引換ニ、会計局預札ヲ發行スルコトヲ達ス、

一〇〇四 藩庁射の場内ニ入り銃丸採掘スル者ヲ

嚴禁ス

海軍之儀、今般

皇國之全力を以 朝廷ニ於て御新興、一般之御規律

被召建候付、海軍方並船將諸官被廢候条、軍務局江

申渡、可承向々江可申渡候、

但軍艦方附士以下之儀は、何分申渡迄之間、諸事

是迄之通可為候、

明治三年午十二月

知政所

一〇〇六 藩庁新金引換ニ会計局預札ヲ發行スル

コトヲ達ス

一〇〇五 朝廷海軍新設ニ付藩庁ノ海軍方ヲ廢止

一 銀台式歩金之儀、国鈔を以引替被成候処、右之紙札致
払底、御日限内差出候式歩金残文は、会計局預札を以
引替被仰付候処、追て右預札国鈔を以引替相成賦候間、
夫迄之間諸人通融国鈔同様取遣可致候、尤取渡ニ付て
は、預札ニ致引札、何某より相受取候段、時々月日名
前相記取替可致旨、被仰付候事、

明治三年十二月 会計局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、
十二月 知政所

一〇〇七 藩庁窃盜等ノ警戒ヲ嚴ニセシム

是月(十二月)

藩庁令シテ、窃盜等横行ニ付、警戒ヲ嚴ニセシム、

一 近来盜謀の類盛んに被行、世上の苦難甚敷、凡盜之所
業皆夜更ケ人静まるの隙を伺ひ、或は倉を破り、店棚
を崩し、或は櫃を探り箱を発らくの盜類夥敷、又其内
倉物置之占り、堀垣の防ぎ、門戸のとさし等不行届之
処より看々盜ニ逢候属ひも有之、依て此節別段道路市
中之間夜廻り捕へ方之手続設け置候付、猶又諸人銘々

用心嚴重致へく候、且又此比質屋職之外、庶人右同様
之内職いたし候者共有之、盜ニ不正之品物、多くは右
江致質借処より、盜品手付之道塞るも有之候ては、世
上不融通も可有之故、今形にて右之属ひは各居所・姓
名等明白に上・下両会所詰札明奉行見習方江届可申出
置候、時々糺索の筋も可有之事候間、其心得可罷在候、
尤不相応之品物、或は貴重之武器類持越候者は、出処
姓名怪敷体見及ふ者は、早々両会所江形行可申出、若
大形ニ召置、自然糺之上現れ候者は、屹と科料可申付
候、諸郷之儀も同様心得、其処役筋江申出、役筋より
両会所江宛可申出候、此旨向々江可被申渡候、

明治三年十二月

糺明局

右局々江通達、

一〇〇八 島津忠義所勞ニヨリ新年ノ諸礼式等ヲ

中止ス

是月(十二月)

忠義公御所勞ニヨリ、新年ノ諸礼式等ヲ中止セシム、
一 従四位様御事、御所勞被為 在候間、来正月年頭御式

明治3年(1870)

御快氣迄之間、御流被 仰付候、此旨同々江可申渡候、

明治三年午十二月

知政所

一〇〇九 藩庁島津齊彬ノ真影ヲ照國社へ廣大院

画像ヲ神産日神社ニ合祀ス

是月(十二月)

齊彬公ノ真影ヲ照國社へ、廣大院画像ヲ神産日神社ニ合祀セシム、

一齊彬公御写真御像

右照國社江御合祀

一廣大院様御画像

右諏訪神社脇

神産日神社江御合祀

右は旧福昌寺江被納置候処、此節右之通御銘々

御遷座被為在候旨被

仰達候条、銘々社司江申渡、向々江も可申渡候、

明治三年午十二月

知政所

【参照】

(島津氏正統系図)

重蒙

○中略

女子

○中略

女子

○中略

女子

女子

於篤 茂姫

○安永二年癸巳六月十七日生、母市田貞行女

○五年丙辰七月十九日、許嫁徳川豊千代君參照治濟卿嫡子為

大樹家治養子、遂承、大統即家齊公也、於是幕府賜名稱茂姫

○天明元年辛丑閏五月十九日、入一橋宮、其後為近

衛経熙公養女、賜名寔子、称茂姫君、為

大樹家齊公御台所

○天保十五年甲辰十一月十日薨、法名廣大院殿超譽

妙勝貞仁大姉

○以下略ス

一〇一〇 記録編輯ニ付維新以来朝官拜命ノ者ノ
履歴ヲ録上セシム

是月(十二月)

記録編輯ニ付、維新以来士庶人ニシテ、朝官拜命シタル
者ノ履歴ヲ録上セシム、

[第十一号]十二月(弁官)

御記録編輯御用ニ付、御一新以来士庶人ニテ、朝官拜
命ノ輩、履歴事実左ノ通、分部記載可差出候也、

但死亡致候者ハ、其親族ヨリ取調可差出事、

一 姓戸・実名・年齢並父祖名

一 叙任並奉職ノ始末、又ハ別段御用向相勤候次第

一 建白並緊要ノ願届等大意御附紙共

一 文武技芸或ハ著述等

一 在藩ノ節履歴概略

以上

明治4年(1871)

〔表紙〕

忠義公史料 明治四年正月

一〇二一 藩庁年初ノ式礼ヲ達ス

明治四年正月朔日、藩庁年初ノ式礼ヲ達セリ、

(按) 年初ノ式礼ハ、明治三年ノ式礼ト同文ナレトモ、

掲ケテ参照ニ資ス、

〔番号五二〇と同文により削除〕

一〇二二 勅使乗船ニ搭シ西郷・大久保等上京ス

明治四年正月二日、勅使乗船ニ搭シ、西郷吉之助・大久

保一蔵等ノ一列出発上京セリ、

(記) 此日西郷兄弟^{吉之助}、^{真吾}・川村^{与十郎}・池上^{四郎左衛門}・大久

保^{一蔵}等ノ一列、勅使乗船^{英國船}ニ搭シ、午前八字出航

セリ、同船日向細島ニ回航シ、同所ニテ勅使ノ一行ヲ

迎へ、同船長門ニ向フノ予定ナリシナリ、

【参照一】

大久保利通日記四年正月

二日

一 今朝大迫子入来、十字照國社參詣、二丸江出頭、從三位公江拜謁、御暇乞且見込種々言上イタシ候、御本丸江出頭、知事公江謁シ帰宿、今日発足ニ付類客多シ、六字乗船、彦之進・伸熊二子相携、

【参照二】

寺師宗道日記

辛未正月元日

〔前略カ〕

明日西郷吉之助上京、岩倉侯同列之人々大久保・川村與十郎乗舟出役之由ニ付、東京へ之書状認ム、市來英之丞来ル、

【参照三】

道島正亮日記四年正月二日

一二日ニ岩倉公乗舟ノ英舟、日口口へ相廻候由、此便ヨリ西郷吉之助東京表へ差越候由、尤池上四郎左衛門ハ長・土へ差越、会合イタシ出兵相成ヤニ候、西郷カ斷ニ、此節出兵之儀ハ、他藩ヲ可頼ニテハアラサレトモ、薩長土三藩同盟之儀ニ、最初ヨリ盟約イタシ候儀ニテハ無之候得共、自然ト今ノ機會ニ相成候付、打合不致候テハ、如何之儀モ可有御座候間、一応引合イタシ、其上東京之都合イタシ、出兵可致トノ由ニ相聞得候、但今西郷前件通申進候得共、既ニ同盟イタシ、建白被成候儀モ有之候付、此節西郷カ申分モ、突留タル訳ニテモ有之マシク、深く勘考スヘシ、

一〇二三 社寺領ノ上地ハ府藩県ニ管轄セシム

明治四年正月五日、社寺ノ所有地ヲ収メ、代ルニ廩米ヲ以テシ、其地ヲ府藩県ニ屬シ、管庁ヲシテ僕隸ノ世次給祿ヲ檢覈録上セシメラル、

明治四年正月五日

御布告写

諸国社寺由緒ノ有無ニ不拘、朱印地・除地等従前之通被下置候処、各藩版籍奉還之末、社寺ノミ土地人民私有ノ姿ニ相成、不相当ノ事ニ付、今度社寺領現在ノ境内ヲ除ノ外一般上知被 仰付、追テ相当祿制被相定、更ニ廩米ヲ以テ可下賜事、

但当年收納ハ従前之通被下候事、

一領知ノ外ニ旧政府並領主等ヨリ米金寄附ノ分、依旧貫当年迄被下候向モ有之候処、来未年ヨリ被止候事、

但家祿ノ内ヲ以テ、寄附致候儀ハ別段ノ事、

一上知ノ田畑百姓持地ニ無之、社寺ニテ直作或ハ小作ニ預ケ有之分、年貢諸役百姓並相勤ルニ於テハ、従前ノ通社寺ニテ所持致シ不苦候事、

但地所ニ關係ノ事務ハ村役人差図可致事、

右之通被 仰出候条、府藩県ニ於テ管内ノ社寺へ可相達候事、

今度社寺領一般上知ノ儀、別紙ノ通被 仰出候ニ付、是迄支配致候府藩県へ、土地更ニ管轄被 仰付候事、

但高帳ハ追テ可相渡事、

一祿制御改革ニ付テハ、元有祿之社寺ニテ、是迄召仕候譜代ノ家来共三代以上元給祿高、二代以下勤年数二十

ケ年以上五ケ年以上、譜代新規抱等ノ差別ヲナシ、管轄府藩臬ニ於テ人名取調可差出事、

但一季抱ノ分ハ不及差出事、
右之通相達候事、

一〇二四 勅使一行三田尻ニ着船上陸ス

明治四年正月六日、勅使一行三田尻着船上陸セリ、

(記) 正月四日細島着船、全月五日勅使乗船、全六日午前二字三田尻着船、全日午前八字上陸、全七日午前八字発途、午後四字山口ニ着、八日西郷・大久保二人木戸ニ論議スル処アリ、事稍々協フ、全九日勅使藩庁ニ就キ勅命ヲ伝ヘラレタリ、

【参照】

大久保利通日記四年正月

四日

一四字細島へ着船、勅使今日当所へ御着、御旅館へ御見舞申上候、

五日

一七字 勅使御乗船、八字前開帆、終日航海、今夜七字

過佐賀關、二字三田尻着船、

六日

一八字 勅使御上陸、從テ一同上陸スリヤロ江旅宿、木戸子・杉子等見舞、

七日

一八字 勅使御發途、從テ一同出發、四字山口江着、木戸子・山縣子入來、外ニ大属兩人入來、山縣子へ尚又内論^{輪力}尽力ノ義ヲ談ス、

八日

一今朝西郷子入來、川村子江西郷等入來、晝後木戸子入來、西郷子兩人ニテ旨趣及談話候処、何モ異論無之、ヨホト解釈之趣ニ相見得、大ニ安心イタシ候、今日山形子モ入來有之候、

九日

一今日当藩於政庁

岩倉大納言殿 勅使御勤仕、從二位公御請、就所勞暫時御猶予御願ノ由、

一土州行ノ処ハ、西郷・池ノ上当藩合議ノ上、行向ノ筈ニ候処、尚又及勤考候処、兎角今度ハ難得機會ニ候、此挙取失候テハ、再度可救ノ術無之ニ就、長・土ノ結

合第一ノコトニ付テモ、西郷・小臣土州尽力ノ方可然故、老西郷へ及示談候処、尤同意ノ由故、其筋ニ決定ス、就テ木戸子モ同行イタシ度及相談候処、右ニ決ス、昼後西郷氏同行、勅使江參上、小臣等土行、且木戸子同行ノ事相伺候処、可然旨ノ御事ニ候、

一〇二五 藩庁有馬新助外二名ニ地頭ヲ命ス

明治四年正月十日、藩庁有馬新助外二名ニ地頭ヲ命スルコトヲ達セリ、

一出水・野田・高尾野・阿久根地頭

有馬新助

一鹿屋・始良・大始良・高隈地頭

加藤権兵衛

右之通繰替被仰付候、

一長嶋地頭

伊集院直二

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未正月十日 知政所

(記) 出水・野田・高尾野・阿久根四郷及長島ハ薩摩国

出水郡ノ内、鹿屋・始良・大始良・高隈ノ四郷ハ大隅国肝属郡ノ内ナリ、

一〇二六 藩庁鶴ヶ嶺神社及新嘗祭ノ祭日ヲ達ス

明治四年正月十日、藩庁鶴ヶ嶺神社及新嘗祭ノ祭日ヲ達セリ、

一鶴ヶ嶺神社御祭日

祈年祭

二月五日

一新嘗祭

十一月十八日

右は当年御神事、右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未正月十日

知政所

(記) 鶴ヶ嶺神社ハ、島津歴代ノ祖霊ヲ祠ル所ナリ、

一〇二七 西郷・大久保毛利親子ト時務ヲ議ス

明治四年正月十日、西郷・大久保、毛利從二位・山口藩知事ニ謁シ、時務ヲ申言シ、薩長連合国事ニ尽サルベキ

コトノ議ヲ決セリ、

(記) 本月六日以来、木戸ヲ主トシテ、藩吏ト会談、議相協フニ至レリ、仍テ更ニ相携ヘテ、土佐ニ赴キテ、爾処アラントシ、木戸同行ニ決シ、遂ニ本日藩知事父子ノ確答アルニ至リシナリ、

【参照】

大久保利通日記正月

十日

一 今朝西郷子同道、木戸子江相訪、土行ノ相談ニ及候処、同意有之及安心候、昼後從二位公・知事公御逢被成度トノコトニ付、同道藩庁江出頭而公面謁、具ニ西郷子ヨリ旨趣演舌何モ御異論無之、且木戸子始政府役人一同列席、是又所存無之、此上ハ弥同心協力、一藩ヲ抛チ 朝廷ノ御基本ヲ助驥尾ニ從テ御尽力可相成トノ趣御決答有之候、先以当藩之処、都合能相濟候、且又土行ノ処、杉大参事モ同行決定ノ由承候、

十一日

一 今早朝 勅使御旅館江出頭、昨日ノ次第及言上候、且御奏聞書ノコトニ付云々御示談有之候、西郷子へ立寄り帰宿、一書相認西郷示談ノ上

岩公へ差出候、從今日湯田村へ転宿温泉ニ浴ス、

一 御国元ヨリ飛脚參、桂氏宿元へノ一封相托ス、

一〇一八 私ニ空地開墾或ハ地目変換ヲ禁シ漸次

定制ニ帰セシム

明治四年正月十四日

府藩県へ御達書

近来農間ニ於テ、窃ニ空地ヲ開墾シ、又ハ持地へ切添作り取致シ候隠地之類、或ハ荒地起返ヲ不申立、或ハ無願シテ畑田成、田畑成及ヒ田畑ヲ屋敷地ニ致シ候類、往々有之哉ニ相聞へ、不届ノミナラス、銘々持地モ相混シ、争論ノ基トモ相成、以之外ノ事ニ付、総テ御釐正可相成筋ニ候得共、從來之弊習一時ニ洗除候様ニモ難相成、其俣打棄置候テハ、追々経界紊乱、終ニ許多之罪人可出来儀ニ付、府藩県各管庁ニ於テ、平常懇篤ニ説諭ヲ加へ、漸々定制ニ帰シ候様可取計事、

一〇一九 西郷・大久保・木戸等 高知ニ発航ス

明治四年正月十六日、西郷・大久保・木戸等ノ一行乗船、高知ニ発航セリ、

(記) 山口ノ会谈一致セシヨリ、此機会ヲ逸セス土佐藩ヲ説キ、大ニ謀ル処アラントシ、此日西郷・大久保兩人、木戸・杉參事孫七郎等一行ト、小軍艦ニ搭シテ高知ニ向ヘリ、

【参照】

大久保利通日記四年正月

十二日

一今朝山縣子・三好子入来、山縣子今日為暇乞入来、昼后小西郷子・川村子入来、当所江岩公御出ニ付、御旅宿へ参上囲碁、六字過帰宿、木戸子入来、

十三日

一今朝西郷始一同発足、小子逗留、小西郷子・川村子発足懸入来、昼后発足、今夕木戸子・三好子入来、

十四日

一今日発足、連日雪粉々、今朝モ四山皚々眺望スクレ候、両子彦・仲相携発足、二字過鳥屋口江着、与老西郷子同宿、岩公モ今日山口御発途、当所へ御着、

十五日

一勅使岩倉公御発船、川村子・小西郷子随從発船、且兩子及直太郎等先行イタサセ候、小子等逗留、木戸子・杉子等今日当所へ着、

十六日

一木戸子・杉大參事、老西郷同行土州へ差越候、外ニ長藩三好子・宮城子・池ノ上子・井上子・濃崎子原方随從ニテ、小軍艦ニテ八字乗船、九字過出帆、終日航海、東風少々強シ、

一〇二〇 藩庁指南役ノ職級ヲ置クコトヲ達ス

明治四年正月十二日、藩庁指南役ノ職級ヲ置クコトヲ達セリ、

一四等指南役

但九等官調役助次

右之通被召建候条、軍務局江申渡、可承向江可申渡候、

辛未正月十二日

知政所

一〇二一 浮浪ノ徒豊後地方ニ横行スルヲ以テ、

京阪・箱館・新潟地方ノ警備ヲ命ス

明治四年正月十七日、浮浪ノ徒豊後地方ニ横行スルヲ以テ、京阪及箱館・新潟地方ヲ警備セシメラル、

御沙汰書写

北海道開拓使

函館港取締向至重之儀ニ付、手薄ニ候ハ、近傍諸藩

へ出兵可申付事、

但藩々へハ、兵部省ヨリ兼テ相達置候事、

一〇二二ノ二

新潟県

新潟港取締向至重之儀ニ付、手薄ニ候ハ、近傍諸藩

へ相達、出兵之儀可取計事、

但藩々へハ、兵部省ヨリ兼テ相達置候事、

一〇二二ノ三

兵部省

函館在来其外ノ兵隊ヲ以、同港取締被 仰付候条、軍

監一名出張可為致事、

但出張之上ハ、地方官打合取計候様、可相達事、

兵部省

近来浮浪之徒暴行、不穩趣ニ付テハ、函館・新潟兩港

取締向、至重之儀ニ付、手薄ニ候ハ、近傍諸藩へ相達、出兵可為致、尤藩々へハ其省ヨリ兼テ相達置候段、北海道開拓使・新潟県へ 御沙汰相成候間、此旨相心得、兩港近傍諸藩へ、預メ可達置事、

一〇二三 藩庁刀劍ノ技術研磨スヘキコトヲ訓達

ス

明治四年正月十八日、藩庁刀劍ノ技術研磨スベキコトヲ訓達セリ、

一刀劍之技術は、全体 皇国尚武之英風精心之所寓ニシテ、万国ニ卓越したる儀ニは候得共、乍生れ堪能之者は無之道理故、古来幼より老ニ至り其芸を相嗜、勉々致研究来たる事ニて、今や銃砲熾成時世と雖、遠達近守之術不可偏廢詎合故、既ニ火術を專要とする暎国、尚兵隊中操劍之規則有之儀は、一同聞知之通候間、此度右技術引立方之儀、軍務局委任被仰付候、就ては諸流百般ニて、他流之者よりは、存分差引調兼候情実も可有之候得とも、元来銃刀之兩術は、兵士左右之翼にて、此節柄実戦之掛合ニ基キ、致勉励候様、師家談合

可致指揮旨、軍務局并師家江申渡、向々江も可申渡候、
辛未正月
知政所

(記)

是迄刀劍師範家ノ儀、軍務局支配被仰付、当世態柄故
申談門人引進候様、尤刀劍ノ儀ハ、皇國ノ基本ニテ、
不可廢儀故、致勉勵候様トノ旨、知政所ヨリ通達相成
候事、

未正月十八日

一〇三三 藩庁小学校員外諸生入学ヲ聴ス

明治四月正月十八日、藩庁小学校員外諸生入学ヲ聴スコ
トヲ達セリ、

一員外諸生

但拾八歳以上

右此節被召建候小学校江入学被仰付候条、望之者は勤
方之有無・年輩相記、本学校江相付願出候様、向々江
可申渡候、

辛未正月十八日

知政所

一〇三四 高知藩庁・文武館・騎兵屯所等見物ス

明治四年辛未正月廿日

八字比ヨリ、藩庁・文武館・騎兵屯所并銃兵屯所見物
後、調練場へ差越騎兵稽古等拝ス、

常備二大隊・砲二座・騎兵二小队但三十人ツ、

大参事 板垣退助 五藤如山

権大参事

深尾真澄 福岡藤二

木山只一郎 林 嶺吉

少参事

金子平十郎 下村銈太郎 大脇彌十郎

権少参事

奥村又十郎 乾 佐七

岩崎矢太郎 谷 平二

寺田恬藏 伴 権太

大隊長

一山路仲七郎

二祖父江可成

砲北村助十郎

人口三十万人ト云フ、

十八日

一〇二五 高知藩知事西郷等ノ議ヲ容レ、追テ確答ノ旨ヲ答フ

一今朝板垣大参事入来、凡之趣意相咄候、何レモ一同集會相願度旨ノコトニ候、西郷子入来、同行訪木戸子、亦木戸子昼後入来、明日一会イタシ度トノコト候旨、木戸ヨリ承候、昼后訪西郷子、

明治四年正月二十日、高知藩知事西郷等ノ議ヲ容ラレ、

十九日

追テ確答ニ及フベシトノ旨ヲ応ラレタリ、

一今朝当藩下村魁鮭太郎子入来、訪杉氏、西郷子入来、今夕板垣大参事・福岡権大参事・下村某・木戸子・杉子・

(記)正月十六日三田尻ヲ発航シ、十七日土佐浦戸ニ着

シ、一同上陸、夜ニ入り高知ニ達ス、十八日板垣大参

事退助ニ会谈シ、更二十九日、板垣・福岡権大参事・

下村少参事ニ西郷・大久保・木戸・杉ト合同シテ、三

藩連合協力国事ニ当ルノ議ヲ決ス、二十日藩知事ニ申

述シテ同セラレ、追テ板垣上京ノ際ニ、確答ニ及フベ

シト応ラレタルナリ、

何レ知事へ申聞候上、可及返詞トノコトニ候、先宜キ都合ニテ、大ニ安心、

二十日

一今日昼後木戸子入来、及福岡権大参事入来、昨日談合ノ次第、知事公御聞込何モ御異論無之、板垣大参事出京ノ節御決答有之候、今夕西郷子入来、

大久保利通日記四年正月

十七日

一今朝東風不止、船行少シク遅シ、四字過浦戸へ着船、

則端船ヨリ一同上陸、城下迄海上三里、七字過一商家

へ休息、十一字旅亭へ就、横山某ナル者ナリ、

一〇二六 藩庁地頭副役ヲ罷メ民事職役ニ兼掌ス

ルコトヲ達ス

明治四年正月二十五日、藩庁地頭副役ヲ罷メ、民事職役

二兼掌セシムルコトヲ達セリ、

一地頭副役之儀、御吟味之訳有之、以来別段不被建置、
民事奉行・同副役見習之間を以、夫々分任被仰付候条、
是迄之副役をも致兼掌、毎事地頭申談、一昨年来追々
被仰渡置候趣は勿論、此節被 仰達候御趣意貫徹、職
掌致勉勵候様被 仰達候条、民事総裁・地頭江申渡、
可承向江も可申渡候、

辛未正月廿五日

知政所

一〇二七 藩庁盜難等ノ事變ハ巡察方江申告スヘ

キヲ達ス

明治四年正月二十七日、藩庁盜難等ノ事變ハ、尔今巡察
方江申告スベキコトヲ達セリ、

一盜賊又は異変之儀有之、会所詰札明方江届申出候事件
は、以来巡察方へも同様速ニ届可申出旨、可承向江可
申渡候、

辛未正月廿七日

知政所

一〇二八 藩庁地頭ノ職責ヲ訓示シ、管掌ノ条件

処分ヲ達ス

明治四年正月二十七日、藩庁地頭ノ職責ヲ訓示シ、管掌
ノ条件処分ヲ達セリ、

一地頭之職掌は古来より治乱重任、殊一昨年来被 仰出
候ケ条ニ基キ、夫々心得も有之筈候得共、逐日世態不
容易形勢ニ立至リ、且此節御檢地等も被 仰出候上は、
一層厚相心得為可申、更ニ左之通被 仰付候、一旦有
事之日ニ当て、士民職業之励ニ匹敵之國ニ劣候ては、
國非其國へし、故に士を支配するものは、士の分を尽
させ、農を支配するものは農之分を尽さする事能はさ
るは、有司之大恥なり、抑士ハ治に國家の政教を助け、
乱ニ貪暴之賊を征し、農ハ治乱共士之保護を仰て、國
力助るのミ、故に中古以来地頭之職分は、管轄内之士
民をして各令得其所にあり、勿論昔は兼て支配之兵士
に將として、遠征をも相勤候処、方今之兵制は部伍之
定数有之、地頭尅人管轄内之常備兵ニては、一大隊ニ
至兼候故、先ツ遠征は不調事候得共、自地戰に至るは、
常備・予備之惣勢を以、方鎮之郷々致指揮候儀勿論ニ
候へハ、兼て学問・武道を励ミ、士風を正すは勿論、

變時之手当向万端自身より可相励事ニ候、

一 御檢地ニ付ては民事局之成規遵奉は勿論、奉行差入之上は時々出會、檢地之御作法并以來其郷にて心得可相成件々委悉談合致帳留、尔後交代等之節は土地・人民地方明細帳次渡し、聊たりとも憲法不相壞様可取計候、

但地頭交代之節は、新地頭其郷江差入候上、右明細帳等次渡相濟候ハ、双方より届可申出候、

一 御建山は御定法も有之事候得共、其外ニても數本之大木切出候節は、民事方見分之上可得免許候、

但百姓屋敷廻、其外御定法之租稅地ニ自分仕立之分は、先度御定通、

一名山・大川は國家光氣之存する處、匹夫之私有ニ非るは勿論故、山海之稼キ新ニ相關候分は、時々民事局江可伺出候、

一 民政は、第一信義を以行ハるゝ事候付、不得止事之事件に非されは、既布之定法相變間敷、尤無抛致改革度事件候ハ、小事たり共民事局江可申出候、
一 土地之位ニ從て相当之租稅なけれハ、国力不相立は人々知処ニ候得は、以來は開拓地連ても御定法鋤下年限之外、不相応之下免申立候共、決て取揚間敷候、

但凶作之稅は、民事局江可得差凶候、

一 土着士族御軍役高割を以、常備之兵員被相定候上は、以來所軍役用と唱へ、他之訴訟申立候儀、可成丈遠慮勿論之事、

但官私之ため其郷にて取起度儀は、不差置可申出候、
一 勸農之儀、播種・收穫・培養術ニ至り、夫々民事局より申渡候儀は勿論、自然於外方致伝習候事件之内、実驗之上取與度儀も候ハ、民事局江申出致免許候様可取計候、

右之通被 仰達候條、地頭并民事局・軍務局江申渡、可承向江も可申渡候、

辛未正月廿七日

知政所

一〇二九 西郷・大久保等一行外国船ニテ東京ニ向フ

明治四年正月二十九日、西郷・大久保・木戸・板垣ノ一行外国船ニ搭シ、東京ニ向ヘリ、

(記) 正月二十一日高知ヲ発シテ、乗船神戸ニ向ヘリ、二十二日神戸ニ着船、更ニ乗船大坂ニ着宿、二十四日・

二十五日・二十六日・二十七日大坂ニ滞在、互ニ往来アリ、二十八日大坂ヨリ乗船、神戸ニ向ヒ滞宿シ、二十九日米國船ニューヨーク号ニ乗船、東京ニ向ヘリ、

【参照】

大久保利通日記四年正月

廿一日

一今朝当藩発途、九字頃西郷子・池ノ上子等、端船ニ乗り相発ス、杉子・木戸子等ハ別船ナリ、十二字浦戸へ着船、則本船江乘、十二字半当港発ス、

廿二日

一今日十一字頃神戸へ都合着船、今五字飛脚船ヨリ大坂江差越、今夕九字大平所江着イタシ、

廿三日

一今朝朝税所子入来、同道西郷旅宿江訪、所々寛歩イタシ帰ル、

廿四日

一海軍諸生等入来、昼后池ノ上・西郷子入来、

廿五日

一今朝熊本藩安場権大参事・大田黒子等入来、訪西郷子、昼后五代子・西郷子入来、

廿六日

一今朝林兵部権大丞・有川十子・大山彦八子(マヤ)東大坂府知事西四辻公入来、信吾入来、

廿七日

一終日不出、信吾子入来、木戸子入来、西郷子入来、

廿八日

一今朝八字西郷子兄弟、池ノ上等同行、運上所ヨリ川蒸汽乗船出發、十二字前神戸江着船滞在、

廿九日

一西郷子入来、同所知事中山子入来、今日ニ一ヨロク發船ニ付、西郷子同行乗船、尤木戸子・山縣・三好三子、板垣子等皆同船也、五字過出帆、

三十日

一終日航海、今晚景志州鳥羽沖ニ至ル、始テ富岳雲間ニ聳ルヲ見ル、

一〇三〇 徴兵ノ行装料及ヒ旅費定則ヲ頒ツ

明治四年正月晦日、徴兵ノ行装料及ヒ旅費定則ヲ頒ツ、
明治四年正月三十日

府藩県徴兵士族平良其卒 支度料并営所ニ到ル迄之旅費定則
一支度料金拾兩

右ハ、行程百里外二百里迄ノ里数ニ賜、五十里外百里
迄ハ半數、二十五里外五十里迄三分ノ一金三兩一步、

二十五里以内ハ四分ノ一金二兩二步可賜事、

但二百里外ハ五十里ヲ以テ準抛トス、二百一里ヨリ

二百五十里迄ハ一ヶ四分ノ一、

一旅籠料

一泊永二百文
一晝永百文

一御手当

一日金二朱

荷物人足

兵員五人へ一人

右之通被相定候事、

一〇三二 藩庁小学校生徒操行ヲ慎ムコトヲ達ス

明治四年正月晦日、藩庁小学校生徒ノ操行ヲ慎ミ、暴為
ニ流レサルベキコトヲ達セリ、

一此節兩小学校被召建、幼若之子弟多人数致出入事候付、
夫々校内之規則も有之、第一礼讓を以致交際儀ニ候得
共、万一途中往来之者は、不凶爭論等相生し、応變之
所置取違暴激之時機立至候ては、学校御取起之 御趣

意不相叶事候間、屹と取違之儀共無之様、親戚より兼
て厚く可致教諭候、右ニ付ては見聞をも掛置候條、若
不法之行狀於有之は、其身は勿論、父兄等へも屹と可
及沙汰候、此旨申渡、向々江も可申渡候、

辛未正月晦日

知政所

(記)従前城下士族ノ子弟ハ郷中ト唱へ、城下ヲ十數区
ニ分チ、各々團結ヲ立テ、規約ヲ定メ、文武ヲ奨励ス
ルノ習ナリ、故ニ年少ノ子弟ハ彼区内ニ通スルヲ許サ
ス、積弊自ラ一區ニ割抛シテ、平生爭競止ム期ナシ、
戊辰以来大ニ其陋情ヲ去リ、多少彼此ノ通間容易ナリ
シモ、尚年少ノ輩ニ至テハ、睚眦ノ小爭絶へサルニ由
リ、今回本学・小学兩校ヲ設ケ、各区ヲ通シテ生徒ヲ
募ルニ至レルヲ以テ、嚴ニ陋習ヲ戒飭シタルナリ、

一〇三三 藩庁生子隱殺ヲ戒飭シ其罪条ヲ達ス

明治四年正月、藩庁生子隱殺ノ弊習ヲ戒飭シ、其罪条ヲ
達セリ、

一生子隱殺之父母は、其所引廻之上流罪、
一右を訴出候者は、誰にても屹と褒美、

一 右を隠し居、自然脇方より於露頭は、親族・五人組重キ科料、

右は氏子繁息するハ神道本意、厚生之道は政教之第一二候処、以前ニは偏卑刻薄之輩、故ニ生子不致養育向も有之、然るに 御一新以来、右等之非人道之大罪を犯候者は、決て無之事ニは候得共、刑賞は邦之常典、人道を維持するの要務ニ候故、以来右之通律法被定置候条、糺明局・監察局江申渡、御藩内一同江早々不洩様可申渡候、

辛未正月十日

知政所

一〇三三 藩庁本学校及小学校ヲ設置シ、職員ノ

等級ヲ達ス

明治四年正月、藩庁本学校及小学校ヲ設置シ、職員ノ等級ヲ達セリ、

一 洋学局

右被召置、学頭始諸官被廢、

一 本学校

右洋学局跡江被召建、管轄等之儀外学校同様被 仰付

候、

嶋津隼人元屋敷内江

一 小学校第一校

生産方引統江

一 小学第二校

右二校此節新ニ被召建、本学校管轄被仰付候、

三等官

四等官

五等官

一 学頭

一一等教官

一二等教官

六等官

七等官

八等官

一 三等教官

一一等副教官

一二等副教官

九等官

十等官

十一等官

一 三等副教官

一 調役

一 筆者

右之通本学校教官并諸官被召建候、

六等官

八等官

九等官

一 小学頭

一一等学教授

一二等教授

十等官

一 三等教授

右之通小学校教官被召建候、

但筆者之儀は、本学校之内より差分相勤候様被仰

付候、

右は是迄之洋学風偏見固陋之弊有之、国務ニ通し世用ニ相立候場ニ到兼、方今

皇政御一新、文運開明之際難被差立詔合付、右之通廢立被仰付候条、旧習を一洗し、皇漢洋三学を兼脩し、普通之学問を被開、天下国家之有用相成候人材輩出、皇国維持之基を被為立候

御趣意ニ付、其段深く体認し、屹と其詮相立候様可心掛旨、教官以下之面々江申渡、御藩内一般へ可申渡候、但諸生入学之手続等は、追て可申渡候、

辛未正月十日

知政所

一〇三四 藩庁小学校生徒入学人員及其手續ヲ達

ス

明治四年正月、藩庁小学校生徒入学人員及其手續ヲ達セリ、

一小学校諸生 四百人

但八才より拾八才迄

内九拾人、是迄之洋学諸生被召入候、

右孰も可為無禄候、左候て是迄和漢洋学館、又は兵士

学問所等江出席、御扶持米被成下候向は、是迄之通被成下候、

右之通此節被召建候小学校江、御城下士族子弟之内より入学被仰付候間、志之者は父兄又は近親之者より、廿三日限御達江相付願出候様、早々可承向江可申渡候、

正月

知政所

本文ニ付、願書差出候節は時々月日并順番相記置取束、来ル廿四日限り可差出事、

一〇三五 藩庁検地着手ノ期ヲ定メ其注意ヲ達ス

明治四年正月、藩庁検地着手ノ期ヲ定メ、其注意ヲ達セリ、

一今般鹿兒島中諸屋敷御検地被仰渡候付ては、上は練兵場ニ初り、下は軍務局初りにて、双方一手ツ、被差出、諸局之御用地等は来ル十八日より相初管候、尤細々は先達てより追々申渡置通候間、其心得にて罷居候様向々江被仰渡候、此段申出候、以上、

未正月

民事局

右之通被仰付候条、向々江可申渡候、

辛未正月

知政所

外役々ニテ候半、

(記)

明治四年辛未正月

一此節御藩内大御支配ニ付、都テ城下居屋敷御竿入、未

正月十八日ヨリ相初候事、

一〇三七 藩庁十二夜祭ヲ停止シ宮比神初午祭ヲ

挙行スルコトヲ達ス

一〇三六 藩庁検地職員宅地等立入ノ旨ヲ達ス

明治四年正月、藩庁民事局検地職員、宅地内等立入ニ及
ブベキコトヲ達セリ、

明治四年正月、藩庁十二夜祭ヲ停止シ、宮比神初午祭ヲ
挙行スルコトヲ達セリ、

一御藩内村落庶民、旧来之弊習致評議、未神祇道 御一

新之御趣意ニモ不相叶候付、從來祭來候十二夜亦ハ庚

申祭等之儀、基仏家之余習付致廢止候、以來毎月初午

之宵ニ宮比神祭いたし候様被仰付候条、地頭江申渡、

可承向江可申渡候、

一此節鹿兒島諸屋敷并近在近々御検地取付之賦ニ付、就
テハ路付之節被仰渡置候通、士族屋鋪其外借地之面々、
境垣踏分可致通融儀モ可有之候付、其通相心得居候様
布告可有之候、以上、

正月

民事局

【参照】

道島正亮日記明治四年正月十八日

一正月十八日ヨリ、鹿兒島御城下御検地初り、陸軍所ヨ
リ初リテ、上・下両方ヘ相分り、六手被差出候由ニテ、
留略ス、參政ハ 桂四郎 橋口彦二 大迫喜右衛門其

午正月

知政所

本文ニ付、宮比神ハ宇宿ノサヤノ神ニテヨシ、天女左
右ニハナノ様成モノヲ持候、三月末方持歩キ候事、其
節ニ正躰何様カト相尋候得共、不相分候、

一〇三八 贖金兌換ノ期過クルニ由リ極印下付ス

ヘキヲ令ス

明治四年正月二十五日、贖金兌換ノ期過クルニ由リ、尔来ハ極印下付スヘシト令セラル、

一銀台贖金引換期限相過候ニ付テハ、自今諸上納金其外貨幣改所へ差出候節、贖金ノ分ハ都テ従前ノ通斷截ノ上、可下戻筈之處、△形極印ヲ打下ケ渡候ニ付、以来贖金部類ハ、金銀混合ノ地金ニ候間、造幣開寮ノ後ハ為吹替持參可為勝手事、

辛未正月

太政官

一〇三九 上納金ニ付大蔵省ヨリ達ス

明治四年正月

一是迄諸上納金、貨幣改所包緘ノ上持參候処、以来正金・楮幣ニ不拘、右改相濟次第為替方へ相渡、同所預リ証書ヲ以上納可致事、

辛未正月

大蔵省

一〇四〇 諸藩ノ私ニ租法ヲ改正スルヲ禁ス

明治四年正月二十五日、諸藩ノ私ニ租法ヲ改正スルヲ禁セラル、

〔頭註〕「第三百五十三條」消滅一
一租税ハ建國ノ基本ニシテ、民心ノ向背ニ關係至重ノ事件ニ付、追テ海内一般ノ法則可被相定候間、藩々ニ於テ、新ニ改革増減等ノ儀、總テ伺ノ上可取計事、

辛未正月

太政官

一〇四一 新潟外国人居留地関門通行其所轄ノ印

鑑ヲ用ユヘキヲ達ス

明治四年正月廿四日

〔頭註〕「制度彙纂」ニ依リ消滅一
一先般諸官員始府藩県士卒ニ至ル迄、横濱其外外国人居留地関門、自今其管轄所之印鑑ニテ通行相成候ニ付、照準之為メ居留地関内へ、兼テ印鑑差出置候様相達候処、新潟モ同様之儀ニ付、此旨更ニ相達候事、

辛未正月

太政官

〔朱〕
「参考外」

明治四年正月

西郷隆盛小話三節

寺師宗道日記抄三節

道嶋正亮日記抄二節

横山正太郎非征朝鮮論

日光山一件違書一ツ

一〇四二 西郷隆盛小話三節池上日記

明治四年正月廿三日ヨリ大先生へ依頼

小夜聞之候要用ヲ記置也、

土浦之藩士大久保要人、平山甲蔵之門ニ入シニ、纔一年ニテ逐塾、初メ入門之時刀ノ縁頭赤銅ニテ拵へ置キ有ルヲ見テ、武士ノ刀ニケ様ノ物ハ用ニ不立、直ニ改ヨト云テ、小ヲ以テ柄ノ糸ヲ寸々ニ切崩シセヨト云々、

或時大久保翁蚊帳ヲ懸テ寢居ヲ見テ、刀ヲ以テ釣手ヲ悉ク切落シ、武ヲ学フ者は位ノ事ニテハ行ケル物ニ非スト云、

一平山甲蔵、是ハ江戸人ニテハ近代最モ豪傑也ト、梅田

海十郎初テ面会ノ節、我ハ山崎派ノ学者也ト計リ云テ、

外ニ何モ不云ト、

右先生捕ニ就シ前云ニ就テ、糺彈ノ日今日ハ寒熱往来

甚難義ナリ、故ニ亦氣ノ好折

一〇四三 寺師宗道日記四年正月

同廿四日 朝雨晚晴

旧臘廿七日、肥前徴兵一大隊人数六百八門、

歩兵一大隊、急ニ信州一揆蜂起、県令ヲ殺シ、山ニ引

籠剛情ニ募リ候ニ付、被差向候由也、一揆ハ百姓原之

事にて、竹鎗火繩筒杯之事ニ、ケ様ニ 朝廷之駭閃卒

然之至と物笑之由、肥前も能ク御受ニ相成りたるとの

説也、

同廿五日 晴

去十二月十八日、東京ニおひて参議廣原兵助ヲ暗殺せ

しと云、子細は不知、右廣原は長州藩にて候由、例刻

帰ル、奈良原喜格同道ス、

同廿六日 雨天

出席候、今日局臨時祭礼候ニ付、皆々寄合酒杯戴候、夕刻帰ル、奥州式藩ニ一揆起リ知藩事ヲ追出し、強情ニ募リ候由、仙臺藩より庄へ鎮静ニ及候由也、外城硝石一条取しらす、江夏喜藏へ國分一条引合ス、

一〇四四 道島正亮日記

一〇四四ノ一 長州ノ士廣澤兵助東京參議ニテ候処、イカサマ奸曲之者故カ、旧冬中旬ノ比カ、三人頭巾ニテ顔ヲカクシ、夜中忍ヒ入、妻ト卧居候ヲ打果、女ニハ手疵負セ、此女ヲシバリ金ヲ出セ、又諸書付モアルヘシ、可被差出旨達候処、シハラレ候テハ、差出儀不相叶旨申入候処、則解キ免シ、金ヲ出候由、女ハ夫ヨリユルシ候半、未切手不相知、決テ長州ノ奇兵隊共ノ仕業ナラントイフ説アリシ由、仁禮新左衛門着ニテ相嘶候由、圓州ヨリ承候、又新左衛門嘶ニ、長州ノ穴戸トイフモノ、新左衛門出立之晩打果筈ノ由承候ヨシ、是モ其通ナラント被申タル由、

一〇四四ノ二 一肥前ノ大隈 (マ) ハ、東京ノ大藏省ナランカ、先度チ

ヨボクレモ有之候、此者金ノ短刀拵候、身ハ惣金ニテ、銀ニテ乱刃ヲ模様ニイタシ、天下人口ニ名高キ事ニテ、段々細工人ノ所ニ見ニ差越候由、然処出来上リ候テ之事ナラン、或時小國之諸侯ノ士參リ、真実ニ某ハ何某ノ弊臣ニテ、寡君ヨリ無抛貴公ノ此節御拵ノ金短刀、折ニ相咄候処、頻ニ歎賞イタサレ候得共、拙者口上迄ニテハ安心不被致、暫時拝借イタシ見セ候様頻ニ被相望候、何卒拝借相願候カト申候処、大隈無何心イト御易キ事ナリトテ差出候処、慥ニ預リ書迄イタシ相請取候由、其後不相返、段々相尋候得共、于今全ク不相知候由、

二月七日谷氏ヨリ承候事、

一〇四五 海舟秘記

朝鮮征討ノ議草莽間盛ニ主張スル由、畢竟皇國ノ萎靡不挺ヲ慨歎スル余リ、斯ク憤激論ヲ発スト見ヘタリ、雖然兵ヲ起スニ名アリ義アリ、殊ニ海外ニ對シ一度名義ヲ失スルニ至テハ、譬ヒ大勝利ヲ得ルトモ天下万世ノ謗誹ヲ免ルヘカラス、兵法ニ己ヲ知り彼

ヲ知ルト云フコトアリ、今朝鮮ノ事ハ姑ク舍キ、我國ノ情実ヲ察スルニ、諸民ハ飢渴困窮ニ迫リ、政令ハ瑣細ノ枝葉而已ニテ、根本ハ今ニ不定、何事モ名目虚飾ノミニテ、実効ノ立所甚薄ク、一新トハ口ニ唱ユレトモ、徳化聊モ見ヘス、万民洵々トシテ、隠々土萌^{朔方}ノ兆シアリ、若我國勢充実盛大ナラハ、区々ノ朝鮮豈能非礼ヲ我ニ加シヤ、慮リ爰ニ出テス、只朝鮮ヲ小国ト見侮リ妄ニ無名ノ師ヲ興シ、万一蹉跌アラハ天下ノ億兆ニ何ト云シ、蝦夷開拓サヘモ其土民ノ怨ヲ受ル多シ、且朝鮮近年屢外国ト接戦シ頗ル兵革ニ慣ル、ト聞ク、然ラハ文祿ノ時勢トハ同日ノ論ニアラス、秀吉ノ威力ヲ以テスラ尚数年ノ力ヲ費ス、今佐多某輩所言ノ如キ朝鮮ヲ掌中ニ運サントハ欺己欺人、国事ヲ以テ戯トスルハ是等ノ言ヲ云ナルヘシ、今日ノ急務ハ先綱紀ヲ建テ、政令ヲ一ニシ、信ヲ天下ニ示シ、万民安堵セシムルニ在リ、姑蕭牆意外ノ變ヲ凶ルヘシ、豈朝鮮ノ罪ヲ問ニ暇アラシヤ、

右ハ至愚之見込御座候得共、添テ差上候、以上、

堂々至誠士 ^(泣読) 休談丹心旨 立言如貫耳 鬼神悼其死

如何赤墀下 唯鬢髮寒齒 嗚呼誰委靡 邦家有之子

一〇四六 日光山一件

一〇四六ノ一 達書

去ル九日從県令御達書写一山一坊中へ

一満願寺所置之儀ニ付、叡山ヨリ達中有之筈ニ候得共、

当分当県之趣意ヲ以テ、玄米百石被下置候事、

一二荒山社東照宮神動被止候事、

一兩社ハ前社人へ可引渡事、

但日限并手続等巨細可申出事、

一兩社へ關係之仏具類一切銘書ヲ以テ可申出事、

一何院へ致合併候哉可申出事、

一現存之僧侶名前書可差出事、

但当時現存スト雖云、進退ハ可任望事、

右廉々早々可申出、猶追々可相達候也、

辛未正月 日光県

杜家中

一〇四六ノ二 届書

一二荒三社東照宮其方へ神動申付、

一二荒社務ニ付、玄米十石当分被下之、
一東照宮社務ニ付、玄米十石当分被下之
一其外諸給一同ハ帰農被仰付候、尤賜金有之候事、
右之通被仰出候趣日光表ヨリ申越候、此段御届申上候、
以上、

辛未正月

日光山惣代

医王院

静岡御藩庁御中

一〇四七 廣澤參議變死ニ付司法卿へ上申案

司法卿へ上申案

故廣澤參議變死ニ付、同人從者起田正一并妾カネ不審
ノ次第搜索書、別紙一綴之通綿貫権大警視・別府大警
部ヨリ申出候、右一件ニ付テハ、兼テ安藤大警視樓々
申立之趣モ有之、旁御照考ノ上、黒白明瞭千載無遺憾
御審判相成度、別紙相添此段申進候也、

辛未正月八日夜、故參議廣澤真臣寢所へ忍入同人ヲ殺
害致シ、且同衾致シ居候妾カネ儀疵ヲ受罷在、何者之

所業トモ不相分、夫ニ手配リ探索中ノ処、同夜カネ儀
事變ノ際下女ヨシノ部屋へ逃奔リ候節、同人父并妹タ
マ兩人非命ノ死ヲ遂ケ、今又自分モ疵ヲ受候云々申歎
キヨシニ相咄シ候趣、且真臣方ニ於テ、從者起田正一
其他ノ者共ト姦通致シ候儀モ相分リ、右両条取調候ハ
、前書賊ノ手掛可相成モ難計トテ、カネ儀第一大区
へ拘留シ、追々取調候テモ事実押隠シ罷在候処ヨリ、
両三区責問ノ上、父妹變死云々全無跡形儀ヲ取持ヘヨ
シへ相咄候儀相違無之、且從者共ト姦通ノ次第モ夫々
申立候後、同区长屋内へ留置叮嚀ニ会釈、事變ノ実況何
欽心覚ノ廉可有之ト申聞、別段取調モ不致自首致シ候
様、懇々説諭相加へ置候後、カネ儀主人ノ側ニ居ナカ
ラ、無疵ニテハ不都合ニ有之候トテ、正一ノ下知ニ依
リ、刺刀ヲ以テ自ラ疵付候云々、其他時々カネ自筆ヲ
以テ差出候書面別紙ノ通ニテ、彼是正一儀捨置難キ処
ヨリ、捕縛ノ上大区ニ於テ一応取調候処、別紙之通申
立、カネ儀ハ別段調詰モ不致、兩人共司法省へ送致相
成候処、同省ニ於テ、カネ儀ハ如何申立相成候哉不相
分、正一儀ハ大区ニ於テ申立候趣ヨリ順序細カニ白状
致シ候処、臣子ノ分トシテ、恩顧ノ主人ヲ殺害致シ候

儀、如何ニモ不審ニ付、愈正一ノ所業ニ有之候哉、虚
実有体可申立趣ヲ以テ問掛相成候由、然ルニ同人儀如
何相考候哉、忽變言致シ、実ハ主人ヲ殺害致シ候儀、
正一所業ニ無之、大区ニ於テ、嚴敷責問ヲ受ケ堪兼候
ヨリ、一旦主殺ノ趣順序取拵ヘ申立置候旨口換致シ、
夫ヨリ再三覆審ノ節モ彼是曖昧申紛シ居候ヨリ、遂ニ
親戚保管ノ決評相成候由ニ候得共、今一層更ニ探索可
遂旨承知致シ、精微ニ搜索致シ候処、正一・カネ等ノ
外別ニ不審ノ者手掛リ無之、猶又事變ノ砌、真臣方ヘ
罷在候從者小者勿論、近所ヨリ直様駈付候者共取調候
処、銘々別紙ノ通申立、其内大同小異ハ有之候得共、
外ヨリ賊這入候足跡見受候者無之、宍戸教部大輔境ノ
板屏ニ土足ノ足跡有之、右ハ必ス逃出候者ノ足跡トモ
相見ヘス、態ト付候足形ト見受候趣、且真臣ト同食罷
在候カネ儀、其夜ノ始末申立振リ旁ヲ以テハ、内心同
人ヲ怪敷存居候儀ハ銘々申口稍同一ニ有之、就中福井
英晴ハ、旧藩ノ砌国許ニ於テ監察相勸居候者ニテ、真
臣トハ別懇ニ致シ、同人上京ノ節隨從東京ヘ相越、真
臣近所ヘ住居致シ、一旦ハ旧民部省巡察ヲモ奉職罷在、
同人方ヘハ親敷出入致シ、事變ノ節ハ報知ニ依リ、直

様駈付候趣ニテ、英晴義右之通一旦ハ巡察ヲモ相勸居
候者ニテ、探索向モ全ク素人トハ相變リ、随分心得居
候者ト相見ヘ、即チヨリ賊ノ搜索ニ眼ヲ配リ、真臣死
骸ノ疵所ハ勿論、邸内ノ様子又ハカネノ疵所等巨細ニ
檢調致シ、申立候箇条ノ内真臣疵所ハ都合拾三ヶ所ニ
テ、其内左ノ耳脇ヨリ右ノ耳脇迄深疵有之、右ハ上ノ
間ノ方ヨリ討タル初刀ノ疵ト見受候得共、寢間ト上ノ
間ト境ノ襖ハ其節建ヨセ有之候ヲ以テ、今ニ不審存居
候云々、且カネ疵ハ鬢ヘ一ヶ所、長サ二三寸位ニテ、
至テ淺疵、前後淺深無之態ト付タル疵ト見受候云々、
又ハ同人ヲ再三取調ノ末、刑部省ヨリ官員出張相成、
猶又細々取調候処、終ニ理ニ詰リ忽チ口ヲ換ヘ候趣、
別紙英晴差出候書面ニ有之、就テハカネ儀大区ニ於テ
申立候通自ラ刺刀ヲ以テ疵付候ト申立候ニ符合致シ、
且正一儀、大区ニテ申立候口書ニ、主人寢間上ノ間ヘ
初メ立入り、夫ヨリ寢間境ノ襖ヲ明ケ、首筋ヨリ口ノ
辺ヘ掛切付候旨申立候趣ト、死骸ノ疵所英晴檢察シテ
申立候趣ト是又符合致シ、且又正一足形ト板摒ニ付居
候足形ト符合致シ候趣、右ハ同人取調ノ節、事變前廉
石摒ニ登リ隣邸ノ植物ヲ覗キ候儀有之、其節ノ足跡欤

又ハ庚午十二月中主人転宅ノ砌、塀ヲ毀テ荷物持運ヒ候節、踏付候モ難計ト申立候趣ニ候得共、足形付居候ハ、塀ヲ毀テ候所ニ無之旨、別紙藤井善蔵等申立候、仮令塀ニ登リ候儀有之候トモ、棧ニハ足跡付トモ板ニ足跡全形付候謂レ無之、右ハ正一態ト付置候儀別シテ疑敷、又真臣ヲ殺害致シ候儀、正一所為ニ無之候得ハ、前書ノ通カネハ無疵ニテハ不都合ト指図可致謂レモ無之、右旁ノ趣ヲ以テハ正一儀、何分主殺ノ不審ハ難遁者ニ見込候事、

一正一儀壬申四月中、大区ヨリ司法省ヘ送致ノ上、松本中判事・大塚少判事係ニテ、初メ取調ノ節ハ、大区ニ於テ申立候手續ヨリ順序細カニ申立候後、口供ヲ交換スレドモ遂ニ明瞭申披キ相立候儀ニモ無之、依テ猶又同年八月中坂本權中判事有馬元少判事覆ノ節、マ、審ノ字入分詳細及白状、殊ニ牢内ニ於テモ伏罪ノ様子ニテ、口書読聞ノ節ハ書判可致トテ、其砌合牟森助之助ヘ書判習ヒ候儀モ有之候趣相聞ヘ候、斯ク嫌疑ノ廉ニ有之者ヲ、却テ病ニ托シ申立、茫乎曖昧ニ屬シ、判然結審ニ不至、又早川權中判事・中島五等出仕兩人掛リニテ、再三ノ覆審相成候趣ニ候得共、皆松木ノ見込ニ同シ、覆審ノ詮モ不

相立、既ニ正一儀親戚保管ノ決評相成居候趣ニ相聞ヘ候事、

一故真臣從者共ノ内前書正一并石崎婦藏ハ執事ニテ、會計ハ勿論家内ノ所締向其他万事委任相成居候者共ニテ、主人留守中ハ第一取締社可致者共ニ候処、正一ハ主人妾カネト姦通シ、婦藏ハカネト姦通致シ候儀ハ不相分候得共、庚午十二月中、主人不在ノ夜婦藏ノ居間ニテ、カネハ從者藤井善蔵ト同姦致サセ、婦藏ハ下女ヨシト同卧姦通致シ、其外從者岡本勇藏儀モカネト姦通致シ候趣、右体執事ヲ始トシテ、主人留守中ハ兩人ノ婦女ト銘々同卧致シ、所謂遊女屋同様ノ所業、右等犯姦ノ次第ハ司法省ニ於テ、カネハ勿論ヨシ儀モ取調相成、夫々申立候趣ニ候得共、從者共犯姦ノ儀ハ耽ト取調モ無之、其俾相成居候趣相聞候事、

一前書ノ通正一儀、初メ司法省ニ於テ取調ノ節申立候趣ハ、病中ニテ如何申立候モ胸記無之趣ニ付、当日正一容体ヲ診察致候醫師村松保定ヘ尋問ニ及候処、別紙ノ通ニテ、翌日午前迄ハ精神相失候程ノ容体トハ診断不致趣申立候、仮令病人ト雖モ、妄語正語ノ間タハ、醫師ニ不限人々見聞ノ上ニテ可相分儀ニ有之、況ヤ松

本・坂本・早川判事ハ、當時司法省ニ於テモ一二ト可呼面々ニテ、正敷白洲上ニ於テ主殺ノ順序ヲ踏ミ、一旦白状ニ及候末、右ハ追テ妄語ノ様申紛シ、變言致シ未タ疑似ノ廉々瞭然ナラサル者ヲ、其儘親戚保管云々決評相成候次第、右ハ不容易

勅命モ有之候至重ノ囚人ヲシテ、黑白判然結審ニ不至解放ノ議定相成候義、何レノ見込ニ可有之哉、実ニ裁判官ノ処トモ不被存義ト、一同疑惑致シ居候事、

一前書ノ事件何分数年ヲ経候義ニテ、右体悪事相働キ候者ハ、必ス後日ノ露顕ヲ防キ、第一証拠物ト可相成刀等ハ、直様取始末致シ候欵又ハ不目立場所へ取捨候類ノ儀、是該犯ノ通情ニテ、今更右等ノ品々假令搜リ得候テモ、其証其儘可有之目的無之、此上ハ断然前書ノ件々ヲ以テ、正一ハ勿論カネ義モ今一層嚴密鞫問相成候ハ、猶又申口ニ依リ自然証拠ト可相成廉々件々多々可有之哉ト見込候事、

右之通故參議真臣事變ノ始末探索ノ上聞込候間、別紙邸内麁絵凶其外書類一綴相添、此段申出候也、

明治七年八月

綿貫権大警視

別府大警部

鹿児島県史料編さん関係者

顧問

聖心女子大学 講師 大久保利謙

前早稲田大学教授 竹内理三

学習院大学学長 兒玉幸多

東洋大学教授 沼田次郎

前東京大学教授 小西四郎

東京大学教授 山口啓二

委員

鹿児島女子講師 北川鐵三

短期大学教授 村野守次

鹿児島大学教授 桃園惠真

全 教授 原口虎雄

全 教授 四本健光

全 教授 五味克夫

全 教授 桑波田興

鹿児島県立短期大学 教授 芳即正

前宮之城町教育長 山下千本

前鹿児島県維新史料編さん所編集課長 田島秀隆

所長 総務課

中間亨

國分友清

安田繁

野添峻郎

本田親宣

中間茂弘

平野誠一

萩原佳代子

田實勇

下堂園純治

宮下満郎

古賀秋好

堂満幸子

久留涼子

坂口香代子

川崎和子

平山祐子

編集課

鹿兒島県史料

忠義公史料 第六卷

昭和五十三年十一月一日印刷
昭和五十四年一月十日発行

編集 鹿兒島県維新史料編さん所

発行 鹿 児 島 県

印刷 凸版印刷株式会社